甲賀市文化財報告書　第22集

平成25年度　市内遺跡発掘調査報告書

２０１４

甲賀市教育委員会

序

滋賀県の南東部に位置する甲賀市は豊かな自然に恵まれ、国指定史跡「紫香楽宮跡」・「垂水斎王頓宮跡」・「甲賀郡中惣遺跡群」をはじめとした歴史資産も豊富です。甲賀市には現在、約530箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、その数は県内でも有数です。また、甲賀市は関西圏と中部圏の中間に位置しており、新名神高速道路が市内を横断して両地域をつないでいます。このような立地によって今後、市のさらなる発展も期待されています。

埋蔵文化財は地中に埋もれている性格上、目にする機会が少ないものです。しかし、地中に埋もれているからこそ、郷土の歴史を知るもっとも身近な歴史資料であり、先人が残した貴重な文化資産です。このような埋蔵文化財を様々な開発から保護し、さらに記録に留めることも教育行政の大きな責務です。

教育委員会では市内の様々な開発に伴い、埋蔵文化財の試掘調査・確認調査を実施しており、調査によって地域の歴史を語る上で非常に重要な知見を得ることができました。また、水口岡山城跡では遺跡の保存を目的に遺構確認調査を開始しました。それらの調査成果をまとめた本報告書が甲賀市の歴史を解明する一助となり、市民の皆様をはじめ、広く活用されることを願っています。

最後になりましたが、調査に参加していただいた方々、報告書作成にあたり、ご協力をいただいた方々、関係機関に心より感謝申し上げます。

平成26年（2014年）3月

甲賀市教育委員会
教育長　山本　佳洋

例　言

1．本書は甲賀市教育委員会が平成24年度に実施した試掘調査および水口岡山城跡第1次発掘調査の概要をまとめたものである。なお、本書に掲載した調査は、すべて平成24年度に現地調査を実施し、平成25年度に整理調査を実施した。

2．本書で報告している試掘調査にかかる経費は、国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫補助金）および滋賀県文化財保存事業費補助金（県費補助金）を得た。また、水口岡山城跡第1次発掘調査にかかる経費は、国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫補助金）を得た。

3．平成24年度および平成25年度の甲賀市教育委員会における調査体制は以下の通りである。

調査主体　甲賀市教育委員会　教育長　山本佳洋

調査事務局　甲賀市教育委員会事務局　歴史文化財課

課　長　縮谷　隆

課長補佐　長峰　透

大道和人（平成25年度）

埋蔵文化財係　係長　鈴木良章

主査　小谷徳彦（調査担当者）

主査　渡部圭一郎（調査担当者）

4．本文の執筆分担は、次の通りである。

《試掘調査》

全体概要・12-04次・12-06次・12-09次・12-10次・12-11次・12-18次　小谷

12-13次と12-16次　渡部

《水口岡山城跡第1次調査》　小谷

また、本書に掲載した図面の作成は小谷と渡部が担当し、市田まち子・岸本香歩・北森光・佐藤美紀・橋本栄美子・平本瞳が作業にあたった。なお、編集は小谷が行った。

5．本書で使用した水準高は東京湾平均海面高度を基準としている。また、水口岡山城跡第1次発掘調査で使用した座標は、世界測地系に準拠する。なお、本書で示す北は座標北である。

6．本書で使用する遺構略号は次のとおりである。

SB：竪穴住居・掘立柱建物　SD：溝状遺構　SK：土壙・土坑　SX：性格不明

7．本書で報告した発掘調査で出土した遺物や図面・写真類については、甲賀市教育委員会が保管している。

目　　次

試掘調査

全体概要…… 1

12-04次　花池遺跡の調査…… 2

12-06次　水口城遺跡の調査…… 3

12-09次　城南遺跡隣接地の調査…… 5

12-10次　城南遺跡の調査…… 7

12-11次・12-18次　北泉遺跡の調査…… 8

12-13次　柑子遺跡の調査…… 11

12-16次　倉治城遺跡の調査…… 13

水口岡山城跡第１次発掘調査

第1章　位置と環境…… 15

第2章　水口岡山城の概要…… 20

第3章　調査経緯…… 26

第4章　調査経過…… 28

第5章　遺　　構…… 32

第6章　遺　　物…… 45

第5章　ま と め…… 48

平成 24 年度
試掘調査

全体概要

甲賀市において平成24年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査は、開発事業などにかかる試掘・確認調査が18件、開発に伴う記録保存の本発掘調査が2件、保存目的遺構確認調査が1件であった。

開発事業などに伴う試掘・確認調査のうち、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内で実施した調査が7件、同近接地で実施した調査が2件、同範囲外で実施した調査が9件であった。範囲外の調査は「甲賀市みんなのまち守り育てる条例」の規程にもとづき、開発事業の実施に先立ち、遺跡の有無を確認するために試掘調査を実施したものである。なお、開発に伴う試掘・確認調査の件数は、平成23年度の16件より2件増加した。

表1に平成24年度中に実施した試掘・確認調査の一覧表にして示した。このうち、開発に伴う調査で遺物の出土を確認した調査が3件、遺構の存在を確認した調査が4件あったが、記録保存の本発掘調査の対象となるものはなかった。本報告書では平成24年度に実施した試掘・確認調査のうち、埋蔵文化財包蔵地内で行った調査と、同近接地で行った調査のうち、遺構と遺物を確認した調査について概要を記す。また、水口岡山城跡の遺構確認調査については本書の

表1 平成24年度に実施した試掘・確認調査一覧

NO	内容	調査次数	調査開始日	調査終了日	調査地			目的	遺跡有無	遺跡名称	結果				
					町名	大字	小字				調査面積	遺物	詳細	遺構	詳細
001	**試掘**	12-01	H24.4.13	H24.4.16	水口町	名坂	大田	k 店舗	**無**		60.00	○	須恵器、土師器	○	旧流路
002	**試掘**	12-02	H24.4.17	H24.4.18	信楽町	牧		m その他建物	**無**		30.00	×		×	
003	**試掘**	12-03	H24.5.11	H24.5.14	甲南町	杉谷	奥ノ浦	w その他開発	**無**		60.00	×		×	
004	**試掘**	12-04	H24.5.21	H24.5.22	水口町	北脇	花池	i 個人住宅	**あり**	花池遺跡	9.00	×		×	
005	**試掘**	12-05	H24.5.31	H24.6.5	水口町	綾野		n 宅地造成	**無**		45.00	×		×	
006	**試掘**	12-06	H24.6.6	H24.6.13	水口町	本丸		i 個人住宅	**あり**	水口城遺跡	9.00	×		×	
007	**試掘**	12-07	H24.7.18	H24.7.23	水口町	松尾	野澤	k 店舗	**無**		60.00	×		×	
008	**試掘**	12-08	H24.9.10	H24.9.13	甲南町	杉谷	上川原	u その他農業関係事業（農道等を含む）	**無**		25.00	×		×	
009	**試掘**	12-09	H24.9.14	H24.10.12	水口町	水口		k 店舗	近接地	城南遺跡	1,300.00	○	土師器、瓦器	○	自然流路、旧地形落ちこみ
010	**試掘**	12-10	H24.10.22	H24.10.31	水口町	水口		m その他建物	**あり**	城南遺跡	95.00	○	須恵器、土師器	×	
011	**試掘**	12-11	H24.11.8	H24.11.13	水口町	北泉		i 個人住宅	**あり**	北泉遺跡	15.00	×		○	旧地形の段差
012	**試掘**	12-12	H24.11.1	H24.11.5	水口町	新城	北沢	h 住宅	近接地	北沢遺跡	9.00	×		×	
013	**確認調査**	MO1	H24.11.14	H25.3.29	水口町	水口	古城	y 地方公共団体の実施する保存目的の範囲内容確認調査	**あり**	水口岡山城遺跡		○	瓦、陶器、土師器	○	石垣、切岸
014	**試掘**	12-13	H25.1.29	H25.1.29	甲南町	柑子	大平	w その他開発	**あり**	柑子遺跡	4.00	×		×	
015	**試掘**	12-15	H24.12.17	H24.12.17	甲南町	野田	下浦	m その他建物	**無**		60.00	×		×	
016	**試掘**	12-16	H24.12.25	H24.12.25	甲南町	新治	西尾	i 個人住宅	**あり**	倉治城遺跡	9.00	×		×	
017	**試掘**	12-18	H25.3.22	H25.3.22	水口町	泉	笠原	i 個人住宅	**あり**	北泉遺跡	30.00	×		△	溝2条、ピット2基
018	**試掘**	12-20	H25.3.4	H25.3.6	土山町	大野	土々ヶ谷	w その他開発	**無**		230.00	×		×	
019	**試掘**	12-19	H25.3.7	H25.3.7	甲南町	野田	下浦	n 宅地造成	**無**		60.00	×		×	

※12-14次・12-17次は欠番

12-04 次　花池遺跡の調査

調査位置と調査経緯

調査を実施した花池遺跡は、水口町北脇地先に所在し、古墳時代の集落である植遺跡の北側に隣接する。調査地は、遺跡の北東部に位置し、旧東海道の南側に隣接する。これまでの調査は小規模な試掘調査のみであるため、遺跡の性格を把握できる資料は得られていない。

今回の調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査であった。調査は調査面積 9㎡。

調査概要

調査地の基本層序は、上から①コンクリートガラ含む盛土層、②旧耕作土、③黄灰褐色粘質土、④黄灰色粘質土で、現地表面から約 115cm 下で遺構面と考えられる④層を確認したが、遺構を検出することはできなかった。

出土遺物には土師器、陶器、磁器などがあったが、すべて小破片で 2 次堆積層の③層からの出土であった。

まとめ

今回の調査は非常に小規模な試掘調査であったため、遺跡の性格を把握できるような資料を得ることはできなかった。また、これまでの調査も小規模調査ばかりであるため、現状では花池遺跡の様相を知る状況にはない。今後の調査成果に期待したい。

図 1　試掘調査対象地位置図　1：2,500

図 2　土層断面図　1：40

写真 1　調査区全景

12-06 次　水口城遺跡の調査

調査位置と調査経緯

水口城は、古絵図によると、本丸の北側には二之丸があり、本丸の東・西・北にわたって家臣団屋敷が形成されていた。これらを含めて城地とし、その範囲は「郭内」と呼ばれていたようである。水口城遺跡は、この範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲としている。

水口城遺跡の範囲は大半が宅地化されて住宅が密集しているため、これまでに実施した発掘調査は個人住宅の建て替えなどに伴うものが多く、小規模な試掘調査が中心である。過去の調査成果では遺構の残存状況があまり良くなかった。

平成 24 年度の調査地は、県史跡水口城跡の南東側に隣接し、本丸堀の南東角の外側に位置する。調査地の周辺では本丸堀の南側隣接地を平成 22 年度に調査（10-03 次）したが、遺構は確認できず、築城時の盛土と思われる土層を確認したのみであった。今回の調査地は本丸堀に隣接する場所であり、かつ、堀の角部に位置することから、水口城に関係する遺構が確認できることを期待して調査を行った。

今回の調査は個人住宅の建て替えに伴う試掘調査で、調査面積は 9㎡であった。

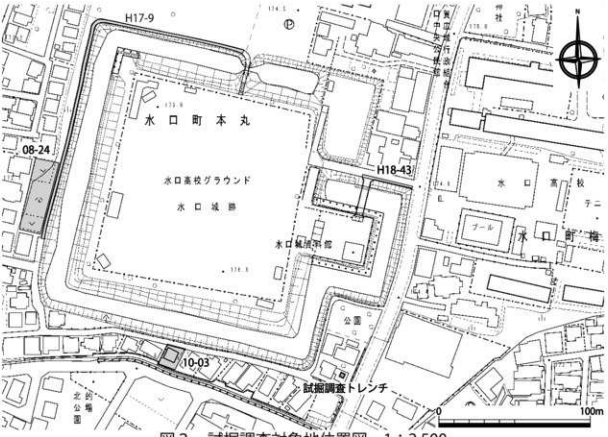


図３　試掘調査対象地位置図　1：2,500

調査概要

調査地の基本層序は、上から①礫混じり灰褐色土（旧建物解体後整地）、②黄褐色砂礫、③暗褐色粘質土（わずかに炭含む）、④黄灰色砂礫（大型の礫を多量に含む　地山）であった。現地表面から約40cm下で②層、80cm下で④層を確認した。

遺物が出土しなかったため、各土層の時期は定かではないが、②層と地山の④層は礫の含み具合に違いがあるが、色調や質はよく似ている。水口城築城時に④層を掘削した土を盛り上げた整地層の可能性を推定したい。

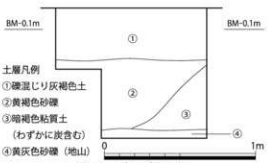


図３　土層断面図

まとめ

今回の調査もこれまでの水口城遺跡の調査と同様に非常に小規模な試掘調査であった。しかし、本丸堀外側で地山層とみられる④層を確認できたことは、今後、周辺での調査を進める上で重要な知見を得ることとなった。

写真２　調査実施箇所（奥側が水口城本丸）

写真３　土層断面

12-09 次　城南遺跡近接地の調査

調査位置と調査経緯

調査地は近江鉄道の線路に隣接するおよそ 40,000㎡の水田地帯である。東側に甲賀市役所水口庁舎があり、同敷地の周辺が城南遺跡となっている。これまでの城南遺跡の調査では遺物の出土がみられるものの、遺構は確認できていない。

今回の調査は、城南遺跡に隣接する場所で大規模開発が計画され、事前に遺跡の有無を確認するために実施した試掘調査であった。

調査は、対象面積 43,770.88㎡に対し、トレンチ 18 箇所、調査面積の合計が 1,300㎡で行った。

図 5　試掘調査対象地位置図

調査概要

調査地の基本層序は、上から①水田耕作土、②暗褐色粘質土（水田床土）、③灰褐色粘質土（1・9・11・16・17 トレンチにはなし）、④黄灰色粘質土（当該地のベース層）、⑤灰褐色砂質土、⑥灰色粘土、⑦灰色シルト（10・12・14・18 トレンチのみで確認）、⑧灰色砂礫（地山）であった。ベース面となる④層は、現地表面から 50 ～ 110㎝下で確認できるが、3・8・12・13・14・15・18 トレンチでは確認できなかった。また、⑤・⑥層は④層の確認できる高さが深くなるトレンチで確認した堆積層である。

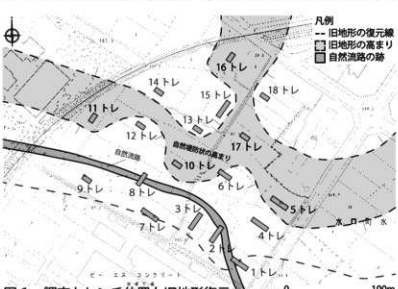


図 6　調査トレンチ位置と旧地形復元

検出した遺構は、自然流路、旧地形の落ち込み、水田暗渠、水田耕作に関連する溝などのみであったが、各トレンチで確認したそれらの遺構をつなぎ合わせると、図 6 のように当該地の旧地形が復元できる。

また、2 次堆積層などを中心に須恵器や土師器、瓦器、陶

磁器などが出土した。出土した土器の時期は、古墳時代から中世または近世までと幅広い。図化できるものについては図７に掲載した。

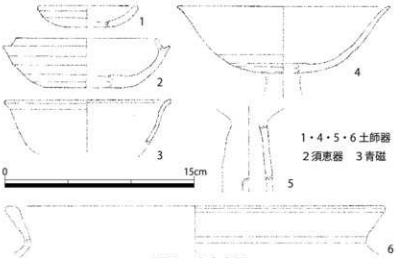


図７　出土土器

まとめ

今回の調査では保護対象となる埋蔵文化財は確認できなかったが、当該地の旧地形が復元できたことは今後の周辺の調査を進める上で重要である。

また、様々な遺物が出土したことから考えると近隣に集落遺跡が存在する可能性が高く、隣接する城南遺跡の今後の調査成果を注視する必要があろう。

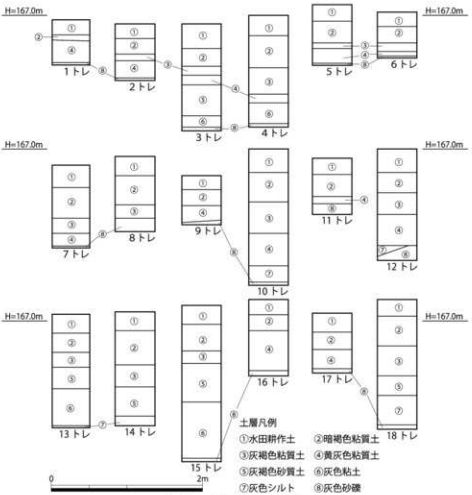


図８　土層断面模式図

12-10 次　城南遺跡の調査

調査位置と調査経緯

城南遺跡は甲賀市役所水口庁舎の周辺に所在する遺跡である。これまでに数回の試掘調査が実施されているが、遺跡の性格を把握できる資料は得られていない。
甲賀市役所水口庁舎の敷地内で行った今回の調査は、建物の建設計画に伴う試掘調査である。調査は2箇所のトレンチで実施し、調査面積は95㎡であった。

調査概要

調査地の基本層序は、上から①砕石層、②礫混じり黄褐色粗砂（造成土）、③暗灰色粘質土（盛土　第2トレンチのみ）、④暗褐色粘質土（旧水田床土）、⑤黄灰色粘質土、⑥灰色砂礫（地山）であった。現地表面から130㎝下で⑤層を確認し、150～170㎝下で⑥層を確認した。

今回の調査では遺構を確認することはできなかった。遺物は土師器や須恵器が少量出土したが、すべて小破片で時期を特定するのは困難であった。

まとめ

今回の調査では遺跡の性格や年代を把握できる資料を得ることはできなった。城南遺跡の様相を把握するためにも周辺での今後の調査に注目したい。

図9　試掘調査対象範囲位置

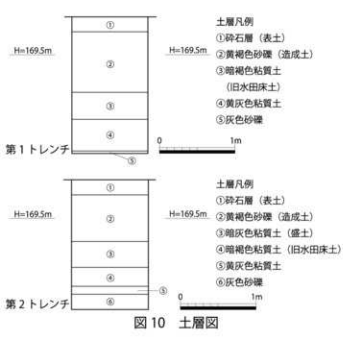


図10　土層図

12-11 次・12-18 次　北泉遺跡の調査

調査位置と調査経緯

水口平野の北部に位置する北泉遺跡は、遺跡範囲のほぼ中央部に5世紀中頃に築造された塚越古墳が立地する集落遺跡である。これまでの調査で塚越古墳の周辺で奈良時代の竪穴建物などが見つかっており、奈良時代を中心とした集落であると考えられている。

12-11 次の調査地は遺跡の北端部に位置し、塚越古墳の北東側にあたる。今回の調査は個人住宅の建設に伴う試掘調査として実施した。調査面積は 15㎡であった。

12-18 次の調査地は遺跡の南東隅部にあたり、東側隣接地を平成22年度（10-06 次）に調査しているが、遺構や遺物は確認されていない。

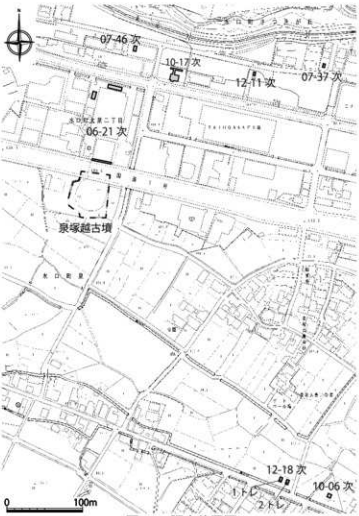


図 11　調査位置図

調査概要

《12-11 次》

調査地の基本層序は、上から①暗褐色土（表土）、②礫混じり淡黄灰色粘質土（造成土）、③黄灰褐色粘質土（造成土）、④黄灰色ないし淡青灰色粘質土（地山）であった。現地表面から 40 ～ 100cm下で④層を確認した。

12-11 次では遺構や遺物を見つけることはできず、旧地形の段差を確認するにとどまった。

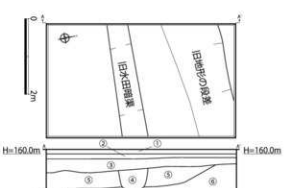


図 12　12-11 次　平面図・断面図

《12-18 次》

調査地の基本層序は、上から①水田耕作土、②水田床土、③礫混黒色粘質土（第1トレンチのみ）、④礫混灰色砂質土（遺構面）であった。遺構面と考えられる④層は、第1トレンチでは現地表面から 44cm

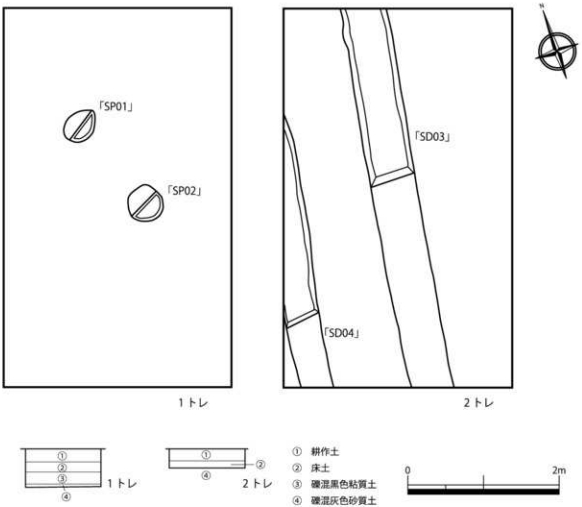


図 13　12-18 次　平面図・土層図

写真 4　12-11 次 調査区全景

写真 5　12-11 次 土層断面

下、第２トレンチでは現地表面から 24cm 下で確認した。

12-18 次ではピット２基と溝２条を検出した。しかし、遺物が出土しなかったため、検出した遺構の年代や性格を特定することはできなかった。

まとめ

平成 24 年度に北泉遺跡で実施した試掘調査は、遺跡の北端部と南東隅部という遺跡の縁辺部での調査となった。

調査成果は、12-11 次では旧地形を確認したのみであり、12-18 次では溝とピットを検出したが、遺構の性格や年代を特定するには至らなかった。

これまでの北泉遺跡の調査が遺跡の縁辺部に偏っている傾向にあり、遺跡の全体像を把握できる調査成果は得られていない。遺跡の中心は塚越古墳を中心とした地域であるとみられ、遺跡中心地域での今後の調査成果によって集落の様相が解明されることを期待する。

写真６　12-18 次 １トレ全景

写真７　12-18 次 ２トレ全景

写真８　12-18 次 SD03

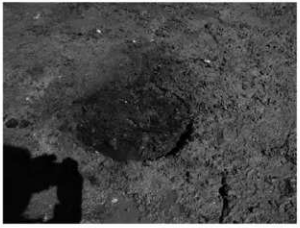


写真９　12-18 次 SP02

12-13 次　柑子遺跡の調査

調査位置と調査経緯

柑子遺跡は甲賀市甲南町柑子に所在する。中世の遺物散布地として埋蔵文化財包蔵地に登録されている。遺跡は杣川の支流である浅野川の西側の水田地帯にあたる。遺跡西側の丘陵上には望月村嶋城遺跡、望月青木城遺跡が所在することから、中世の集落跡の発見が期待された。

今回調査地は柑子公民館の北側の水田の一部に携帯電話基地局建設工事が計画されたことから、遺構の有無を確認するための試掘調査を実施することとなった。調査は平成 25 年 1 月 29 日に実施し、調査面積は 4㎡であった。

調査概要

《基本層序》

基本層序は上から①耕作土、②暗灰色粘土であった。②層は現況地表面から 40㎝下から 120㎝以上の厚みで堆積しており、下層からの湧水が激しかったため、それ以上の掘削を中止した。②層から遺物は出土しなかった。

《検出遺構・出土遺物》

今回の調査では遺構・遺物を確認することはできなかった。

まとめ

今回の調査では遺構・遺物は確認できず、柑子遺跡の内容確認に資する資料は得ることができなかった。今後の調査に期待したい。

写真 10　調査区全景

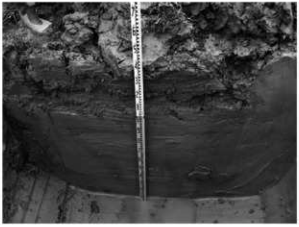


写真 11　土層断面

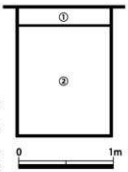


図 14　土層断面図

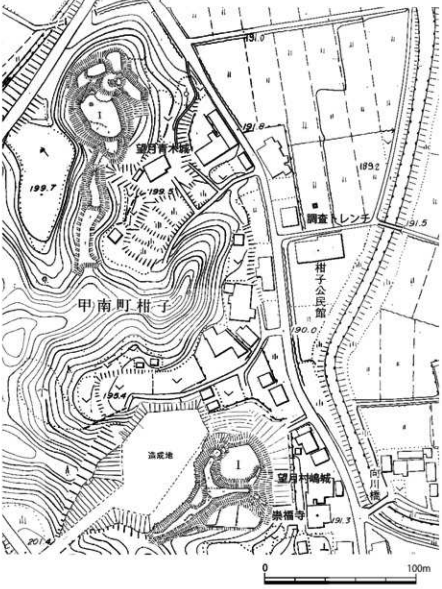


図 15　柑子遺跡　調査トレンチ位置図

12-16 次　倉治城遺跡の調査

調査位置と調査経緯

倉治城遺跡は、甲賀市甲南町新治字西庵に所在する。遺跡は杣川の支流である磯尾川の河岸段丘上に立地しており、東側を磯尾川に北側は崖状の段差によって限られる。『甲賀市史』第7巻によると、倉治城は屋敷地の内部を土塁や堀で区画した平地城館で、少なくとも五つ以上の区画が存在したと考えられている。現状で遺跡の東北隅に土塁dが残り、この外側に逆L字状に水濠aがあり、それらの痕跡と考えられる窪地状の地形が区画Ⅱの周囲に残る。このほか集落内に土塁の痕跡と考えられる高まりがいくつか残存する。

今回の調査対象地は区画Ⅱの西側、空堀状地形の外側にあたる。

調査地では個人住宅の建設工事に伴い、遺構の有無を確認するための試掘調査を実施することとなった。調査は平成24年12月25日に実施し、調査面積は9㎡であった。

調査概要

《基本層序》

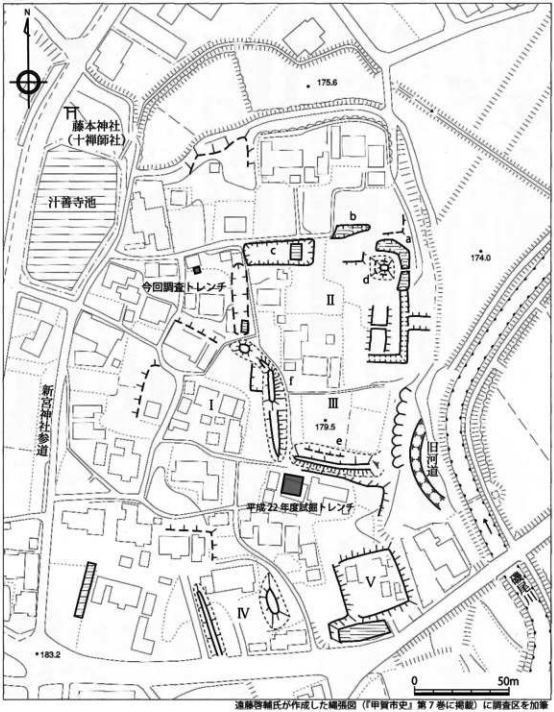
基本層序は上から①暗灰色砂質土（表土）、②茶褐色砂質土、③暗黄灰色砂質土（地山）であった。現況地表面から30㎝で③層に達した。③層は安定した面でしまりも強いが、調査対象地のうち北半部は以前建てられていた建物の基礎によってかく乱を受けていた。同面で検出を試みたが、ピット等は一切検出できなかった。

《検出遺構・出土遺物》

今回の調査では遺構・遺物を確認することはできなかった。

まとめ

今回の調査では区画Ⅱの外側への遺構の広がりを確認することが主目的であったが、調査の結果、遺構や遺物を確認することはできなかった。現況の地表面から約30㎝下で地山の③層に達することから、上面は削平されている可能性があるが、区画Ⅱの内部とは現況でそれほど高低差がないことから、屋敷地内における空閑地であった可能性が考えられる。周辺では土塁eの南側で平成22年に試掘調査を実施している（試掘10-19次）が、城に関わる遺構・遺物は確認されていない（『甲賀市埋蔵文化財調査年報　平成22年度』）。既存集落内の調査で、調査面積も小規模であることから、倉治城の構造を解明する資料は得られなかったが、集落内には空堀状地形をはじめ、旧地形の痕跡が多く残っていることから、今後の調査成果に期待したい。



遠藤啓輔氏が作成した縄張図（『甲賀市史』第７巻に掲載）に調査区を加筆

図 16　試掘調査トレンチと縄張図

水口岡山城跡
第１次発掘調査

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境

滋賀県の南端に位置する甲賀市は、東西 43.8km、南北 26.8 km、面積 481.69 ㎢である。市域は、北を大津市・湖南市・日野町、東を三重県、南を三重県と京都府、西を京都府と接しており、三方を県境とする。琵琶湖に面していない内陸部に位置するが、大阪・名古屋からそれぞれ 100 km圏内にあり、近畿圏と東海圏を結ぶ。国道１号や新名神高速道路が市内を横断している。

図１　甲賀市の位置

市域は東西方向に長い地形で、東側に北から南西方向に連なる標高 1,000 m越える鈴鹿山系、南西側に標高 500 ～ 700 mの信楽山地がある。この山々に挟まれた地域に古琵琶湖層群の形成する標高 200 ～ 300 mの丘陵が広がる。これらの丘陵は、野洲川の北側にある水口丘陵、野洲川と柚川に挟まれた甲賀丘陵、柚川の南側の甲南丘陵に分かれ、長い年月をかけてそれぞれの河川の両岸に河岸段丘が形成された。また、両河川は市の中央北部にあたる水口町泉付近で合流し、琵琶湖に向かって西流する。この合流付近には沖積低地が広がり、周辺の河岸段丘面とともに、南北約 3km、東西約 5kmの市内最大の平野部である水口平野を形成する。

野洲川と並行する国道１号は、鈴鹿峠を越えて三重県亀山市に通じ、仁和二年（886）以降の東海道のルートに近い。また、柚川と並行する JR 草津線は、大津宮時代の東海道である倉歴道のルートに近い。さらに、これらと直交するように、道路では国道 307 号が通り、鉄道では貴生川駅を起点として信楽高原鉄道と近江鉄道がそれぞれ南北に走っている。野洲川と柚川の流域は現代に至るまで重要な交通網として位置づけられ、両河川が形成した平坦地を主な居住空間として多様な文化が育まれてきたのである。

水口岡山城跡は水口平野の東端部、野洲川が水口平野へ流れ出る喉元に立地する古城山に所在する。古城山は標高約 283 m、東西約１km、南北約 500 mの東西方向に横長の独立丘陵である。

地質区分では、水口丘陵は「古琵琶湖層群」、水口平野は「河岸段丘堆積層」および「沖積層」に分類されるが、古城山付近は周囲の地質と異なり、「美濃・丹波帯」と呼ばれる「中・古生層」に区分されている（甲市史委 2008）。

第２節　歴史的環境

琵琶湖に面しない内陸部に位置し、自然環境に恵まれた甲賀市には、山麓部周辺を中心に縄文時代の遺跡が点在する。草創期の有舌尖頭器が野上野遺跡（土山町）や甲南町新治地先で出土した（甲市史委2008）。また、土器では早期の押型文土器が油日遺跡（甲賀町）から、早期後葉の茅山下層式土器や前期前葉の羽島下層式土器、中期後葉の北白川Ｃ式土器などが寺山遺跡（甲南町）から出土している（甲市史委2008）。また、鈴鹿山麓の稜線に程近い位置に弥生時代末から古墳時代初頭の遺跡があり、山女原遺跡（土山町）では伊勢湾沿岸部に分布するＳ字口縁甕が出土し、鈴鹿山脈を越えての交流がうかがえる（甲市史委2008）。

しかし、現在、縄文時代から弥生時代の遺跡は、市の中心である水口地域では確認されておらず、泉古墳群の造営が水口地域の歴史の始まりとなり、これを契機に甲賀の古墳時代が幕を開ける。

西罐子塚古墳は、水口丘陵の小さな尾根の先端部を利用して築造された直径50ｍ、高さ5.2ｍの円墳で、二段築成の円丘部に幅20ｍ、長さ10ｍ、高さ2.5ｍの造り出しが付属する。墳丘の斜面には川原石を用いた葺石を施し、墳頂部や段築のテラスには埴輪を樹立した可能性が高く、採集された埴輪から5世紀前半頃の築造と考えられている（丸山1997、甲市史委2008）。

東罐子塚古墳は、西罐子塚古墳の東約100ｍに築かれた円墳である。直径42ｍ、高さ5.5ｍ。現状では、埴輪や葺石は確認されていない（丸山1997、甲市史委2008）。

5世紀中頃になると、東罐子塚古墳の東約500ｍの平野部に塚越古墳が築造される。昭和36年に土取りのために削られ、その際に内行花文鏡・碧玉製勾玉・四方白金銅装眉庇付冑・三角板皮綴短甲・三角板鋲留短甲・頸甲・鉄刀および鉄剣・鉄鏃が出土し、古墳時代中期の典型的な副葬品の組み合わせであることが判明している（甲市史委2008、甲市教委2012a）。また、平成13年には国道1号線の拡幅工事に伴って発掘調査が実施され、一辺52ｍの方墳で、南辺を除く三方向に周濠を巡らせていることがわかった。墳丘の高さは周濠の底から6.5ｍである。二段築成で、墳丘斜面には葺石を施し、墳頂部には埴輪を巡らせていた。埴輪には家形や盾形などの形象埴輪も含まれていた（滋県教委2004）。

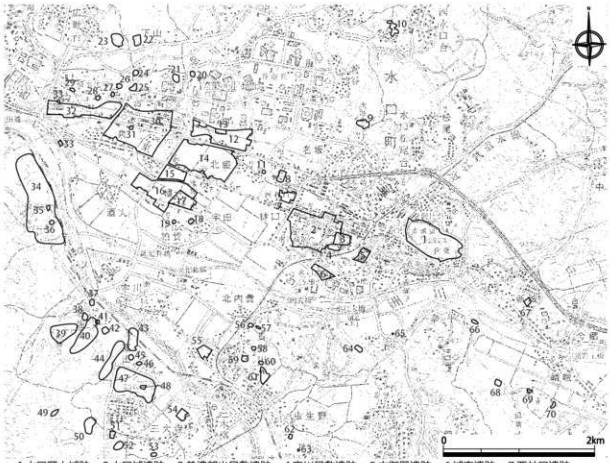
これらの古墳が築造された時期に大規模集落、植遺跡が出現する。平成13～14年にかけて発掘調査が行われ、竪穴住居119棟、掘立柱建物17棟、甕棺墓4基などが検出された。掘立柱建物の中には5世紀中頃の大型倉庫建物が3棟含まれ、その大きさは全国的に見ても巨大である。ヤマト王権との深い関わりを窺わせる（滋県教委2005、甲市史委2008a・2013）。

塚越古墳以降の古墳の築造は小規模な円墳で構成される群集墳が中心なり、泉古墳群の対岸にあたる杣川南岸の丘陵に横穴式石室をもつ古墳が数多く造られるようになる。北から園養山古墳群、岩坂古墳群、岩坂南古墳群、百合野古墳群、奥百合野古墳群、高山古墳群、三大寺落し谷古墳群、城川古墳群、三大寺桜ノ馬場古墳群などである。これらの古墳群を総称して「甲賀群集墳」と呼んでいる。甲賀群集墳は現状で286基の古墳が確認されているが、400基近い数になると考えられており、6世紀前半から7世紀中頃にかけて築造されている（甲市史委2008、甲市教委2008a）。

7世紀前半には植遺跡の北西1.3kmに下川原遺跡が出現し、7世紀前半から8世紀にかけての集落が営まれた。発掘調査では50棟以上の竪穴住居や数棟の掘立柱建物が確認された。また、13

世紀代の遺構も検出されており、中世の集落の存在も窺わせる（甲市教委 2006・2009・2010、滋賀教委 2012、甲市史委 2013）。

下川原遺跡の東側には北泉遺跡が隣接している。詳細な調査は実施されていないが、試掘調査では 8 世紀中頃～後半の須恵器などが出土し、竪穴住居と考えられる遺構も検出されている。



1 水口岡山城跡　2 水口城遺跡　3 美濃部出屋敷遺跡　4 富川屋敷遺跡　5 古御殿遺跡　6 城南遺跡　7 西林口遺跡
8 柏木神社遺跡　9 大池寺遺跡　10 山村城遺跡　11 里北脇遺跡　12 北脇遺跡　13 北脇城遺跡　14 北脇南遺跡
15 花池遺跡　16 植遺跡　17 植城遺跡　18 山中氏屋敷遺跡　19 西出館遺跡　20 東迎山城遺跡　21 西迎山城遺跡
22 下山北城遺跡　23 津山城遺跡　24 伴屋敷城遺跡　25 下山城遺跡　26 伴屋敷遺跡　27 東罐子塚古墳　28 西罐子塚古墳
29 泉古窯跡　30 北泉遺跡　31 塚越古墳　32 下川原遺跡　33 旧東海道横田渡跡　34 園養山古墳群　35 園養寺遺跡
36 三雲寺遺跡　37 岩坂古墳群　38 平子城遺跡　39 最勝寺境内遺跡　40 岩坂南古墳群　41 岩坂屋敷遺跡
42 源太屋敷城遺跡　43 御姫屋敷城遺跡　44 百合野古墳群　45 高山屋敷遺跡　46 一学殿屋敷遺跡　47 高山古墳群
48 高山氏城遺跡　49 奥百合野古墳群　50 三大寺落し谷古墳群　51 小山城遺跡　52 奥谷城遺跡　53 三大寺竹中城遺跡
54 竹石遺跡　55 貴生川遺跡　56 内貴城遺跡　57 川田山古墳群　58 内貴尾山城遺跡　59 内貴殿屋敷遺跡　60 落シ谷遺跡
61 北虫生野城遺跡　62 虫生野堂の前城遺跡　63 森尻古墳　64 北内貴城遺跡　65 高塚古墳　66 波濤ヶ平古墳群
67 北沢遺跡　68 嶬峨西城遺跡　69 千光寺遺跡　70 嶬峨古墳群

図２　周辺の遺跡分布図

9世紀～10世紀には北泉遺跡の東側に北脇遺跡が出現する。北脇遺跡では鉄製品の工房跡と考えられる掘立柱建物などが検出された（甲市教委2008c）ほか、10世紀中頃の近江産の緑釉陶器が数多く出土している（甲市教委2008b・2010）。また、青銅製の印鑑が出土しており（甲市教委2008b）、これまでの調査で確認された遺構や遺物の状況から一般的な集落遺跡とは異なる性格を持っていることが想定される（甲市史委2013）。

11世紀以降の水口地域の遺跡の状況は、発掘調査の件数が少ないため、十分に把握できないが、中世になると、「柏木郷」という名が文献資料の中に現れる。水口町柏木周辺がその地に当たると考えられている。嘉承元年（1106）9月25日に刑部丞源義光（新羅三郎義光）が柏木郷と山村郷の私領を摂関家と園城寺金光院に寄進したとされる（甲市史委2012）。

長寛三年（1165）には「柏木御厨」が伊勢外宮領として置かれ、文治三年（1187）に宣旨されているが、その後、嘉禄二年（1226）に山中俊信が鈴鹿山賊を討伐した功績により柏木荘を領し、宇田に居住したとある。これ以降、山中氏がこの地に居住したようである。「柏木御厨」の正確な位置については不明であるが、山中家文書には15世紀の中頃まで「御厨」関連の史料があること、御厨保司職を代々、山中氏が受け継ぐことになっていること、山中氏の居館が宇田山中と言われていたことなどから、現在の柏木神社から宇田集落一帯が「柏木御厨」であったと推測されている（滋賀県教委2006、甲市史委2012）。

山中氏は天正十三年（1585）に羽柴秀吉の命により元の領地である山中村（現在の甲賀市土山町山中）に戻されるが、植城遺跡では16世紀代の堀などが確認されており、天正十三年までの山中氏の屋敷地と推定されている（滋賀県教委2006、甲市史委2010）。

このように、古墳時代から中世にかけて水口平野の西側の地域が重要な位置を占め、人々の活動の中心であったことがわかる。一方、水口平野の東側の地域は、中世に入り、甲賀衆の美濃部氏が台頭するとともに歴史の舞台に現れるようになる（甲市史委2012）。その後、天正十三年に羽柴秀吉が家臣の中村一氏に命じて水口岡山城を築城させると、水口平野の東側の地域が歴史の中心地となった。

中世の甲賀は、甲賀衆が活躍した時代である。甲賀市内には中世の城館跡が非常に多く、現在、確認されている城館跡は180箇所を数える（甲市史委2010）。中世の甲賀には甲賀二十一家や甲賀五十三家などと呼ばれた土豪の武士たちがおり、彼らが連合して自治を行っていたことがわかっている。これを甲賀郡中惣と呼ぶ。甲賀市に存在する城館の多くは甲賀郡中惣との関連が深いと想定されている（甲市史委2010・2012）。

天正十三年、秀吉が紀州攻めを行う際に甲賀衆も紀州太田城攻めに動員されている。この時に水攻め用の堤に不具合があり、その責任を甲賀衆が負わされた。その結果、多くの甲賀衆が改易となってしまった。いわゆる「甲賀ゆれ」である（甲市史委2012）。水口岡山城が築城されるのは、その直後のことである。水口岡山城は、秀吉政権による甲賀の直接支配の拠点となった城であり、さらには東国への抑えとして重要な地位を占めた（甲市教委2012b）。しかし、関ヶ原の戦いで三代目の城主であった長束正家が西軍に属したため、戦いの後に廃城となる（甲市史委2010・2012）。

その後、水口は幕府の直轄領となり、三代将軍徳川家光の時に上洛の際の宿館として水口城が築かれた（甲市史委2010）。江戸時代の水口は、東海道の宿場町として繁栄し、天和2年には水口藩が置かれ、幕末まで賑わいをみせていた。

《参考文献》

甲賀市史編さん委員会編 2008『甲賀市史』第１巻　甲賀の古代　甲賀市

甲賀市史編さん委員会編 2010『甲賀市史』第７巻　甲賀の城　甲賀市

甲賀市史編さん委員会編 2012『甲賀市史』第２巻　甲賀衆の中世　甲賀市

甲賀市史編さん委員会編 2013『甲賀市史』第５巻　信楽焼・考古・美術工芸　甲賀市

甲賀市史編さん委員会編 2014『甲賀市史』第３巻　近世の甲賀　甲賀市

甲賀市教育委員会・国際航業株式会社編 2006『下川原遺跡発掘調査報告書－滋賀県甲賀市水口町　所在－』甲賀市文化財報告書第７　甲賀市教育委員会

甲賀市教育委員会編 2008a『甲賀の横穴式石室－後期古墳群調査報告－』甲賀市史編纂叢書第四集　甲賀市教育委員会

甲賀市教育委員会編 2008b『北脇遺跡・西林口遺跡　発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第 12 集　甲賀市教育委員会

甲賀市教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会編 2008c『北脇遺跡発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第９集　甲賀市教育委員会

甲賀市教育委員会編 2009「下川原遺跡発掘調査報告書」甲賀市文化財報告書第 13 集　甲賀市教育委員会

甲賀市教育委員会編 2010『北脇遺跡第 12 次・下川原遺跡第 10 次発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第 15 集　甲賀市教育委員会

甲賀市教育委員会編 2012a『古代甲賀の首長と副葬品－塚越古墳出土遺物調査報告－』甲賀市史編纂叢書第８集　甲賀市教育委員会

甲賀市教育委員会・滋賀県教育委員会編 2012b『水口岡山城跡－秀吉政権要の城－』　甲賀市教育委員会

滋賀県教育委員会･(財）滋賀県文化財保護協会編 2005『植遺跡　甲賀市水口町』は場整備関係（経営体育成整備）遺跡調査報告書 32･2　滋賀県教育委員会

滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会編 2004「泉塚越古墳」国道１号線水口道路改築工事に伴う発掘調査報告書　滋賀県教育委員会

滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会編 2006『植域遺跡』は場整備関係（経営体育成基盤整備）遺跡発掘調査報告書

滋賀県教育委員会･(財）滋賀県文化財保護協会編 2012『下川原遺跡　甲賀市水口町泉』一般国道１号水口遺跡（2 工区）工事に伴う発掘調査報告書

丸山竜平 1977「甲賀郡水口町泉所在の古墳群」『滋賀文化財だより』８（財）滋賀県文化財保護協会

第２章　水口岡山城の概要

第１節　水口岡山城の歴史

水口岡山城は、享保十九年(1734)にまとめられた『近江輿地誌略』によれば、天正十三年（1585）に中村一氏が大岡山（現在の古城山）に築城したとされる。築城に際しては、石垣の石材を三雲城、用材や瓦などを矢川寺から調達したことが伝えられている（『矢川雑記』『水口藩士某覚書』）。また、当時、山中には大岡寺があったが、一氏は築城にあたり、南方の字地頭へ寺を移したとされる（『甲賀郡志』）。

中村一氏は、天正十三年五月に岸和田城から甲賀へ入ったとみられ（『貝塚御座所日記』）、水口の河合寺へ掟書を出している（『大鳥神社文書』）。一氏が甲賀へ入る直前の同年四月、羽柴秀吉は甲賀衆を改易した。いわゆる「甲賀ゆれ」である。つまり、秀吉は、それまで甲賀を治めていた甲賀衆から領地を取り上げ、新たな支配者として一氏を送り込んだことになる。なお、『真鍋真入斎書付』によれば、一氏は秀吉から６万石を拝領したとされる。

天正十八年（1590）、一氏が駿河へ移封されると、甲賀の一氏の所領は増田長盛へ引き継がれる（『長浜城歴史博物館所蔵文書』）。この時の所領は３万石であった（『前川道平氏所蔵文書』）が、文禄四年（1595）には所領が５万石となり、その所領は長束正家に引き継がれた（『佐竹氏旧記』）。正家に甲賀の所領を引き継いだ長盛は、大和郡山へ移されている。

長盛と正家は、浅野長政、石田三成、前田玄以とともに豊臣家の五奉行と言われる存在であった。後に三中老のひとりに名を連ねる一氏を含め、水口岡山城の歴代城主は豊臣政権で重要なポストに就いた人物であった。

天正十九年から慶長五年(1600)までの間に出されたとみられる『西川家文書』には、豊臣政権が近江大溝城の天守を解体し、その部材を水口へ運ぶように命じたことが記されている（杉江2012）[1]。この記述から考えると、天正十九年以降に水口岡山城で何らかの改修が行われ、それは二代目城主の増田長盛、もしくは三代目城主の長束正家の時期であったと推測されている（尾下2014）。

慶長五年、関ヶ原の戦いにおいて長束正家は西軍に属した。敗走して水口岡山城へ籠城するが、池田長吉らに取り囲まれて開城し（『近江輿地誌略』）、日野の地で自刃した。その後、水口岡山城は廃城となり、江戸時代には水口藩の御用林となった（甲市教委2012）。

なお、水口岡山城の名称は1980年代から使われている（高田2010）。水口の大岡山にかつてあった城という意味である。城が存在した当時の名称については、古城山の南に位置する本正寺の梵鐘に「水口城下本正寺」という銘文があり、当時は「水口城」と呼ばれていた可能性がある（高田2010）。一方、天正十八年九月十二日付の木下吉隆の書状（『翠関雑記』）や「知行出し候覚の事」（『前川道平氏所蔵文書』）には「甲賀の城」、『舜旧記』の慶長二年(1597)四月十三日の記事には「水口の城」とあり、「地域名＋城」という形式で呼ばれていたようである（尾下2014）。

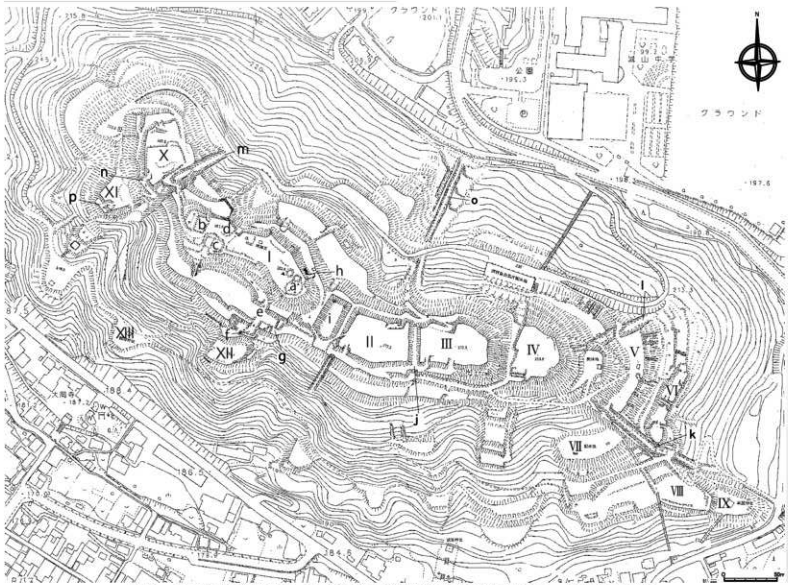


図3　水口岡山城縄張り図　高田徹氏作成(『甲賀市史』第7巻に掲載)に一部曲輪名を加筆

第２節　水口岡山城の立地と構造

水口岡山城は水口平野の東端に位置する独立丘陵「古城山」に立地する。山頂から水口平野が一望でき、甲賀の丘陵地帯も見渡せる。また、眼下には東海道が通る。主要街道を抑え、甲賀の地を治めるには最適な場所であった。さらに、東は鈴鹿峠を望み、東国に対する拠点としての性格も担うことができる位置にあった。

古城山の標高は約 283 m。山頂部と山麓部の比高は約 100 mである。古城山は東西方向に細長い形状をしており、山頂部を中心に主要な曲輪群が展開している。山頂部の曲輪群は大きく５つに分けることができる（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅹ）(2)。

写真１　古城山と山麓の市街地

もっとも高い位置にある曲輪Ⅰは、水口岡山城の主郭と考えられる曲輪である。東西約 130 m×南北約 30 m と細長い曲輪で、現況地形では墨線が不定型となっている。曲輪Ⅰの東西両端には高さ約 50cmほどの土壇がある（ａ・ｂ）。中井家蔵『江州水口絵図Ⅱ』（寛永期）（図４）によると、山頂のもっとも高い部分を「本丸」とし、その両端を一段高く描く。東端の高まり（ａ）に「天守西東六間北南八間」と記され、「本丸」の規模は「北南十七間西東六十間」と記されている。また、『江州水口城図』（図５）によれば、西端部（ｂ）を「本丸」、それ以外の部分を「屋敷形」としている。東西両端の土壇のいずれかが天守台であった可能性は高いが、現状では決め手を欠く。

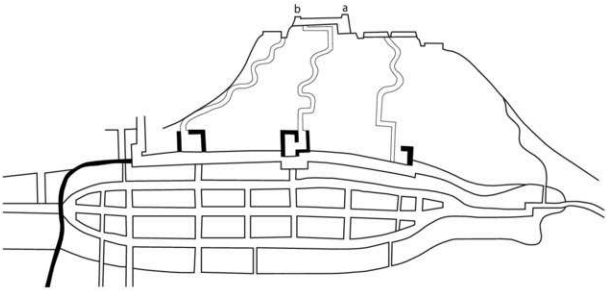


図４　江州水口絵図Ⅱ（部分トレース　一部加筆）

図５　江州水口城図(部分)

曲輪Ⅰへの入口は虎口ｃである。北側にも虎口の存在が想定されている（虎口ｄ）が、現況地形でははっきりしない。虎口ｃからｅ、ｆへと続く道が大手道とみられている。虎口ｆは枡形虎口で導線をクランク状にしている。

曲輪Ⅰの南北には帯曲輪がある。帯曲輪の東端には南北ともに食い違い虎口（ｇ・ｈ）を設けている。曲輪Ⅰの北側斜面で石垣が数箇所で確認できる。現在、曲輪Ⅰの南側斜面には石垣を確認できないが、地表面に多くの栗石が散乱しており、当時は石垣で囲まれていた可能性が高い。

曲輪Ⅰの東側、一段低い位置に曲輪Ⅱがある。堀ｉが曲輪Ⅰと曲輪Ⅱの間を仕切るが、堀ｉの北側と南側は土橋状になっている。曲輪Ⅱは東西約 60 m×南北約 40 mのやや不整形な長方形である。図５には「二ノ丸」と記されている。

曲輪Ⅱの東側には曲輪Ⅲがあり、その間は堀切ｊによって区切られる。曲輪Ⅱと曲輪Ⅲの規模はほぼ同じである。図５によれば、曲輪Ⅲは「三ノ丸」となっている。なお、曲輪Ⅱと曲輪Ⅲの南側斜面には裏込石と考えられる栗石が確認でき、本来は石垣があったと推定される。

曲輪Ⅲの東方には曲輪Ⅳが配置される。両曲輪の高低差は約 13 m。曲輪Ⅲと曲輪Ⅳの間は堀によって区切られていたようで、図４では堀状の凹みが描かれている。曲輪Ⅳの東側下方には２本の竪堀がある。この竪堀と組み合うように曲輪Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸが展開している。それぞれの曲輪の詳細は不明であるが、城の東側を意識した縄張りであると考えられる。

曲輪Ⅲ・Ⅳの北側にある滋賀県企業庁配水池の建設工事にあたり、昭和 56 年（1981）に滋賀県教育委員会が発掘調査を実施している。この調査では切石を用いた溜井戸や石列などが検出されている（滋賀県教委 1981）。

一方、曲輪Ⅰの西側には曲輪Ⅹがある。曲輪Ⅹは曲輪Ⅰより約 12.5 m低い位置にあり、曲輪Ⅰと曲輪Ⅹの間は堀切ｍによって区切られている。また、堀切ｍはそのまま南北の斜面に延び、竪堀となる。曲輪Ⅹの規模は南北約 60 m×東西約 50 m。曲輪中央付近より北側が一段低くなり、北端部がさらに一段低くなる三段構成となっている。また、曲輪Ⅹの南西約 19 m下に曲輪Ⅺが存在する。曲輪の南西端に虎口ｐがある。

大手道に配置された枡形虎口ｆの南側には曲輪Ⅻがある。曲輪Ⅻは虎口ｆを防御するために置かれた曲輪と考えられるが、高低差が約 10 mあり、現在の登山道は曲輪Ⅻよりも上方を通って虎口ｆへ至るルートとなっており、防御的意味合いが薄い。図４によると、大手道となる中央の登城ルートは、曲輪Ⅻとその西側下方に位置する曲輪XIIIの間を通るとみられる。現況地形では曲

輪XII と曲輪XIII の間には幅の広い谷筋があるが、この部分が当時の大手道にあたるのではなかろうか。つまり、曲輪XII と曲輪XIII が大手道を守る役目を担っていたのである。

第３節　山麓の状況と城下町

近世の水口宿および水口城を描いた絵図が複数残っており、いずれにも廃城となった城跡と山が描かれている。これらの絵図をみると、山麓に堀、堀に隣接する位置に枡形を描いている。また、山の南側には紡錘形の三筋町があり、この三筋町の部分が古城山に城があった当時の城下町と考えられている（高田 2010）。

図４によると、山麓部には３箇所の枡形虎口があり、中央の枡形を「大手」とする。また、図５では２箇所の枡形が描かれ、西側を「西追手」、東側を「追手」とし、東側の「追手」が図４の中央の枡形「大手」に対応すると考えられる。

これら３箇所の枡形を現在の地図に当てはめると、中央が大岡寺の南側付近、西側が水口小学校の正門付近、東側が湯屋町（水口町元町）の北側付近にあたる（高田 2010）。枡形の推定地南側には現在も水路が流れ、絵図に描かれた堀を踏襲していると考えられる。このように南側山麓の堀のラインについてはある程度推定することが可能であるが、それ以外の部分が不明確である。

明治 25 年（1892）の陸軍陸地測量部作成の地形図（図６）には古城山北西部に「長池」と呼ばれる池があり、古城山を取り囲んでいたようにもみえることから、古城山の北側まで堀がめぐっていたという指摘もされている（高田 2009）が、現状では確認するのが困難である。

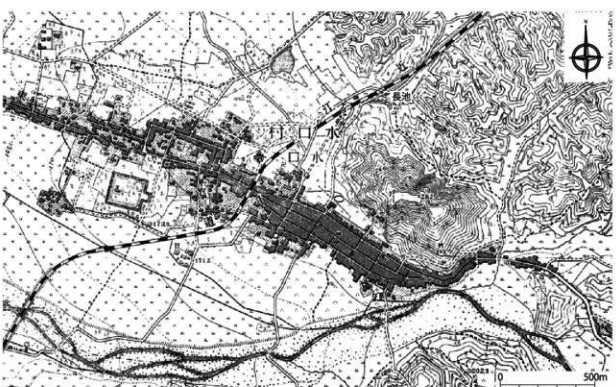


図６　陸地測量部作成地形図

また、『河合修一郎家文書』の「聞書」には「内堀の跡は今ニ残り、外堀は東町通り南裏にから堀の有之候得共、百姓共銘々にうかち、畑にして今はなし」とあり、現状の地形では確認できないが、城下町の南側に空堀の外堀があった可能性がある。

一方、山麓の枡形の内側については、『江州水口絵図Ⅱ』の記述が参考になる。中央の枡形推定地の北側には現在、大岡寺がある。この一帯は、枡形推定地よりも一段高い。『江州水口絵図Ⅱ』ではこの場所に「古御殿屋敷」と「新御殿屋敷」があったと記され、両屋敷地の中央を虎口ｆへ続く大手道が通る。「古御殿」と「新御殿」の詳細は不明だが、山麓部に城主の居館施設が存在したことを想定すべきであろう。『江州水口絵図Ⅱ』には東側の枡形と西側の枡形からも城への登城道が描かれている。現在、そのルートを詳細に把握することは困難であるが、おそらく西側のルートは曲輪Ⅺを通って曲輪Ⅹへ、東側のルートは曲輪Ⅱ・Ⅲへ繋がっていたとみられる。

《脚注》

（1）従来、大溝城から水口岡山城への天守移築の年代は天正十三年とされてきた（滋県蒲郡 1921）が、近年の研究成果によって大溝城の天守解体時期を天正十九年以降とする説が有力となりつつある（杉江 2012）。

（2）水口岡山城の縄張りについては、高田徹氏が詳細に検討されている（高田 2004・2007・2009・2010）。本書においても高田氏の研究成果に従い、『甲賀市史』第７巻に掲載された縄張り図（高田 2010）を用い、曲輪名称を一部加筆して使用する（図3）。なお、本文中の曲輪番号や虎口・堀などの名称はすべて図３で示すものと一致する。

《参考文献》

尾下成敏 2014「天下統一と甲賀」『甲賀市史』第３巻　道・町・村の江戸時代　甲賀市史編さん委員会
甲賀市教育委員会・滋賀県教育委員会 2012『水口岡山城跡－秀吉政権要の城－』
滋賀県教育委員会 1981『水口岡山城跡試掘調査報告書－甲賀郡水口町古城山所在－』
滋賀県教育委員会 1984『滋賀県中世城郭分布調査２（甲賀の城）』
滋賀県教育委員会 1986『滋賀県中世城郭分布調査４（旧蒲生・神崎郡の城）』
杉江　進 2012「大溝城はいつ廃城となったか」『近江地方史研究』第 43 号　近江地方史研究会
高田　徹 2004「水口岡山城」『図説近畿中世城郭事典』　城郭談話会
高田　徹 2007「水口岡山城」『近江の山城ベスト 50 を歩く」　サンライズ出版
高田　徹 2009「水口岡山城の構造」『中世城郭研究』第 23 号　中世城郭研究会
高田　徹 2010「水口岡山城跡」『甲賀市史』第７巻　甲賀の城　甲賀市史編さん委員会
中井　均 1987「水口岡山城」『図説中世城郭事典』２　新人物往来社
中井　均 1997『近江の城』　サンライズ出版
米田　実 1986「水口岡山城」『近江の城』17　滋賀県教育委員会

第３章　調査経緯

第１節　調査目的

甲賀市の中心である水口地域に所在する水口岡山城跡は、豊臣政権の主要の城のひとつであった。これまで城跡について十分な調査が行われなかったが、歴史的価値の高い水口岡山城の全容を把握することは非常に重要である。

そのため、甲賀市教育委員会では平成 22 年度より詳細地形測量調査を実施し、平成 24 年度から遺構確認発掘調査を開始した。調査は今後も継続し、国史跡の指定を目指す方針である。

平成 24 年度に実施した第１次調査は、城の大手側となる南西斜面部を対象範囲とし、大手道に位置する枡形虎口（虎口ｆ）、虎口ｆに隣接する曲輪Ⅻ、城跡西側に位置する曲輪Ⅺの３箇所を対象とした。調査の目的は、大手道および大手周辺の状況確認と城の西側の構造確認である。

第２節　調査体制

水口岡山城跡の調査は、甲賀市水口岡山城跡調査委員会を設置し、調査手法や調査の内容について指導、助言を仰ぎながら進めている。また、オブザーバーとして文化庁文化財部記念物課と滋賀県教育委員会事務局文化財保護課から指導、助言を受けている。

第１回委員会は平成 24 年 10 月 29 日に開催し、水口岡山城跡の現地視察を行うとともに、調査事業の全体計画や進め方、第１次発掘調査の実施箇所について検討した。

平成 25 年２月 19 日に開催した第２回委員会では第１次発掘調査の成果について検討した。調査成果は、平成 25 年２月 27 日に報道機関への記者発表を行い、平成 25 年３月３日に現地説明会を実施した。現地説明会には 160 名が参加した。

なお、平成 24 年度の調査体制は以下の通り。

【甲賀市水口岡山城跡調査委員会】
　委 員 長　杉原和雄　大坂国際大学国際コミュニケーション学部教授
　副委員長　中井　均　滋賀県立大学人間文化学部准教授
　委　　員　松尾信裕　大阪城天守閣館長
　委　　員　高木叙子　滋賀県立安土城考古博物館学芸課主任
　委　　員　山村亜希　愛知県立大学日本文化学部准教授
【オブザーバー】　文化庁文化財部記念物課
　　滋賀県教育委員会事務局　文化財保護課
【調査主体】　甲賀市教育委員会　教育長　山本佳洋
【調査事務局】　甲賀市教育委員会事務局
　　教育部長　安田正治
　　次　　長　大塚文博
　　歴史文化財課　課長　縮谷　隆

課長補佐　長峰　透
埋蔵文化財係　係長　鈴木良章
主査　小谷徳彦（調査担当）
主査　渡部圭一郎

【発掘調査参加者】
《甲賀市臨時職員》
市田まち子　樫木規秀　岸本香歩　北森光　佐藤美紀　寺田昌裕　平井正義　藤本安弘
《シルバー人材センター派遣》
今村昌生　植田幸男　大原和久　小川悦男　菊池幸男　倉田憲次　田代一由　西田健二　伏見義勝　村田惣一　村田了　森口實　山田尚治　渡辺敏章

また、調査中には下記の方にご助言やご指導をいただいた。ここに記して感謝いたします。
下高大輔　髙田徹　林昭男（50 音順、敬称略）

第４章　調査経過

第１節　調査区の位置と規模

第１次調査は城の南西側斜面を調査対象の範囲とし、城の構造を把握する上で重要と考えられる３箇所を選定して、第１区・第２区・第３区とした（図7）。

第１区は、『江州水口絵図Ⅱ』に描かれた３本の登城道のうち、中央に相当するルート上にある虎口ｆ（図3）である。この道は城の大手道と考えられており、虎口ｆは城の中枢部へ入るための虎口にあたる。この虎口ｆの内部構造を確認するために調査を実施した。第１区に設定したトレンチは３本である（図8）。トレンチの規模は、第１トレンチが2.5 m× 3.0 m、第２トレンチが3.0 m× 3.5 m、第３トレンチが3.0 m× 3.5 mである。

表1　調査区とトレンチ規模

調査区名	対象箇所	トレンチ名	規模（m）	面積（㎡）
第1区	虎口ｆ	第1トレンチ	2.5×3.0	7.5
		第2トレンチ	3.0×3.5	10.5
		第3トレンチ	3.0×3.5	10.5
第2区	曲輪 XI	第1トレンチ	3.5×5.0	17.5
		第2トレンチ	3.0×4.5	13.5
第3区	曲輪 XII	第1トレンチ	6.5×5.0 拡張部①2.3×2.0 拡張部②1.5×2.0	40.1
		第2トレンチ	3.5×2.0	7.0
			調査面積合計	106.6

第２区は、第１区の虎口ｆに隣接するように配置された曲輪XIIを対象とした。虎口ｆ側の斜面

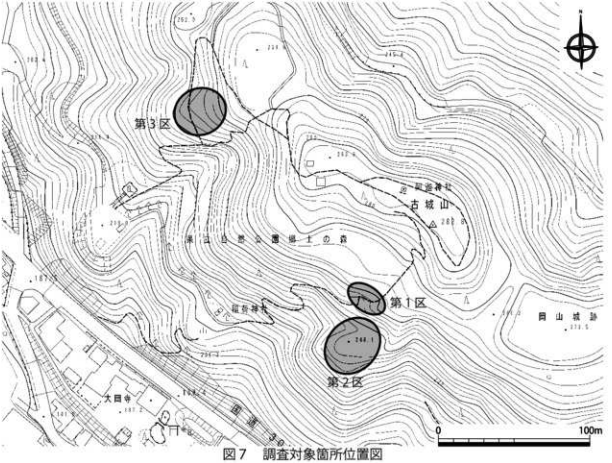


図７　調査対象箇所位置図

の状況と曲輪外側の斜面の状況を確認することを目的として2本のトレンチを設定した(図9)。トレンチの規模は、第1トレンチが3.5 m×5.0 m、第2トレンチが3.0 m×4.5 mである。

第3区は、城の西側の状況を確認するために曲輪Ⅺを対象とした。曲輪Ⅺは城の主要曲輪のひとつである曲輪Ⅹに付随するものであり、曲輪Ⅹの南西側下方に位置している。曲輪Ⅹ側の斜面の状況と曲輪Ⅺの虎口pの状況を確認するために2本のトレンチを設定した(図10)。トレンチの規模は、第1トレンチが6.5 m×5.0 mに2.3 m×2.0 mと1.5 m×2.0 mの拡張部をもち、第2トレンチが3.5 m×2.0 mである。

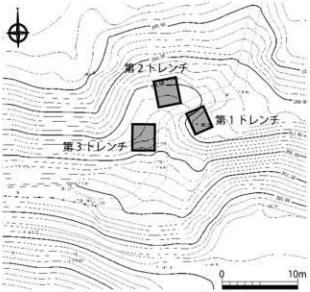


図8　第1区トレンチ配置図

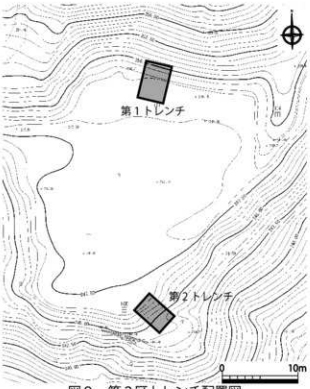


図9　第2区トレンチ配置図

図10　第3区トレンチ配置図

第２節　調査日誌

発掘調査は、平成 24 年 11 月 14 日に開始し、平成 25 年３月 29 日に完了した。
以下、調査の経過について、調査日誌の内容をもとにまとめる。

〔11 月〕
14 日　作業準備・機材準備
15 日～ 27 日　調査対象範囲の下草刈りおよび樹木伐採作業
29 日　第１・２区トレンチ設定
　第２区１トレ　表土掘削（～ 12 月 17 日）

〔12 月〕
４日～６日　第３区　伐採樹木・倒木除去作業
７日　第３区　下草刈り・トレンチ設定
12 日　第２区２トレ　表土掘削
13 日　第２区２トレ　表土直下より栗石出土
　栗石検出のため、黄灰褐色粘質土を除去
17 日　第１区１・３トレ　表土掘削（～ 18 日）
18 日　第１区２トレ　表土掘削
　第２区２トレ　栗石崩落状況写真撮影
19 日　第２区２トレ　栗石崩落状況実測作業（～ 27 日）
20 日　第１区１トレ　土塁部分断割　一部拡張
　第１区３トレ　栗石検出・写真撮影
　第２区１トレ　黄褐色粘質土掘削
21 日　第１区３トレ　栗石崩落状況実測（～１月９日）
25 日　第２区１トレ　黄褐色粘質土掘削（～ 27 日）

〔１月〕
８日　第１区２トレ　黄褐色粘質土掘削
　大きめの石が見え始める。
　第３区１・２トレ　表土掘削（～９日）
９日　第２区２トレ　崩落した栗石の除去および黄灰褐色粘質土掘削　築石と思われる石を確認
10 日　第１区２トレ・第２区１・２トレ　黄灰褐色粘質土掘削（～ 15 日）
11 日　第２区２トレ　石垣の基底石および裏込石を確認裏込の一番奥側に大きめの石並ぶ。
15 日　第２区１トレ　写真撮影（全景および出土状況）
16 日　第２区１トレ　平面実測
17 日　第１区２トレ　石垣検出・精査・写真撮影
　第２区２トレ　石垣精査（～ 31 日）
28 日　第１区２トレ　断割断面調査（～ 29 日）
29 日　第２区１トレ　土層断面実測
　第３区１・２トレ　表土掘削（～ 30 日）
30 日　第１区１トレ　土塁部断割・断面調査（～２月１日）
　第１区２トレ　石垣崩落状況実測（～２月 12 日）
31 日　第１区３トレ　崩落栗石除去
　下層より石垣確認
　第２区２トレ　石垣検出状況写真撮影
　滋賀県教育委員会文化財保護課　木戸氏・伊庭氏来訪　調査状況を説明、指導を受ける。

〔２月〕
１日　第１区３トレ　石垣精査（～７日）
　第３区１・２トレ　黄褐色粘質土掘削
５日　第１区１トレ　精査　土塁裾部に石の抜き取り痕跡を確認
　第１区３トレ　虎口床面に平たい石を確認
　礎石の可能性、トレンチ拡張（～６日）
　第３区１トレ　斜面裾に礎石を確認
　組み合う礎石検出のため拡張
　彦根市教育委員会文化財課　林氏来訪
　調査成果について意見伺う
６日　彦根市教育委員会文化財課　下高氏来訪
　調査成果について意見伺う
７日　第１区３トレ　石垣精査
　第２区２トレ　断面精査

石垣構築方法を確認
第３区１・２トレ　黄褐色粘質土掘削
岩盤露出
８日　第1区３トレ・第３区１・２トレ　写真撮影
12日　第１区３トレ・第２区２トレ　石垣検出状況実測
（～20日）
13日　第１区第１トレ　写真撮影
14日　高田徹氏来訪　調査成果について意見伺う
19日　第２回甲賀市水口岡山城跡調査委員会
調査成果の検討および今後の指導、助言を得る。
20日　記者発表へ向けた準備開始（～25日）
トレンチ内清掃、周囲の草刈、伐採樹木の除去
21日　第１区１トレ　平面実測
22日　第１区１トレ　土層断面実測
25日　第２区２トレ　土層断面実測（～26日）
26日　第１区３トレ　石垣立面実測（～28日）
第３区１トレ　写真撮影
第３区２トレ　平面実測
記者発表事前取材対応
27日　調査成果の記者発表
28日　現地説明会に向けた準備開始（～３月１日）

〔３月〕
３日　現地説明開催
時折、雪が舞う寒い中だったが、160名の方々が
参加してくださいました。
４日　第１区２トレ　石垣立面実測（～５日）
７日　第２区２トレ　石垣立面実測（～８日）
11日　第１区２・３トレ　土層断面精査
第１区１トレ・第２区１トレ　埋め戻し
12日　第１区２・３トレ　第３区２トレ
土層断面実測
13日　第３区１トレ　平面実測（～15日）
第１区３トレ・第２区２トレ　埋め戻し
15日　第３区１トレ　土層断面実測（～19日）
19日　第１区２トレ・第３区２トレ　埋め戻し
21日　第３区１トレ　埋め戻し
現場撤収作業
25日　現場機材洗浄・整備・片づけ（～29日）

写真２　第１区作業状況

写真３　崩落栗石実測作業

第５章　遺構

第１節　第１区

城の主要部への入口に相当する虎口ｆを対象とした調査区である。虎口内に３箇所のトレンチを設定した（図８）。

A　第１トレンチ

虎口ｆの南側にある土塁を対象としたトレンチで、規模は 2.5 m × 3.0 m。土塁の土層断面を確認するために幅 40cm、長さ 1.3 mでトレンチ西端の一部虎口内側に拡張した。

厚さ 15 ～ 20cmほどの表土（①層）および木の根の攪乱を受けた暗黄褐色粘質土（②層）を除去すると、黄灰色を基本とした粘質土が露出した。断面観察の結果、この粘質土は６つに分層（③～⑧層）でき、土塁として積み上げられた土層であることがわかった。虎口ｆを造成する際に、外側にあたる南側には土を積み上げ土塁を形成したのである。

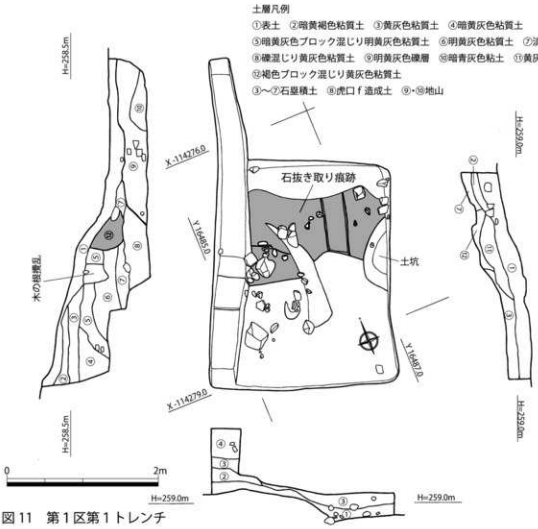


図11　第１区第１トレンチ

写真４　第１区第１トレンチ全景

写真５　石垣積み石抜き取り痕跡

第１トレンチを設定した箇所は、地表面には石が見られず、現状は土塁として認識できる。トレンチ内でも築石のような大きな石は確認できなかった。しかし、土塁の虎口内側にあたる裾部で溝状の遺構を検出した。この溝状遺構は断面観察においても確認でき、土塁の積み土を切っている。検出状況から考えて、土塁の前面にあった石積みの石を抜き取った痕跡と推定される。

トレンチ内では栗石の出土も少なく、この土塁は裏込を伴わない石塁であった可能性が高い。石塁の外側の面は調査を行っていないが、第２区第１トレンチで崩落した石を検出しており、これらの石が石塁の外側に使われていた可能性も考慮しておく必要があろう。

B　第２トレンチ

虎口ｆの北側斜面は切り立った急斜面となっており、地表面に石の露出はなかった。斜面部の状況を確認するために斜面の中腹部から裾部にかけてトレンチを設定した。規模は3.0ｍ×3.5ｍ。

厚さ10～15㎝の表土（①層）を除去すると、礫混じり黄灰褐色粘質土（②層）が現れる。②層は木の根による攪乱を多く受け、非常に軟質な土層であった。この②層を取り除くと、黄灰褐色粘質土（③層）となる。③層には多くの栗石が含まれ、これらの栗石の間から石垣の築石とみられる大きな石が確認できた。断面観察の結果、栗石を含む③層は築石とみられる大きな石を覆っていた。そのため、③層は破城によって石垣を崩した時の崩落土であり、含まれている多くの栗石は転落した裏込石であると判断できた。したがって、転落した裏込石が多く出土した状態は破城の状況を示していると言えるが、そのままの状態では石垣の位置が確定できないことから、築石の上を覆っている崩落石については除去し、石垣の前面に崩落した石についてはそのままの状態で残すこととして調査を進めた。

その結果、トレンチ中央付近にて石垣の築石と考えられる石を３つ確認した。トレンチの南東部については破城の状況を極力残すようにしたため、築石は確認していない。おそらく、検出した崩落石の下に存在すると思われる。

検出した築石は幅50㎝前後。高さは石の下部を確認していないのではっきりしないが、おそらく50㎝程度であると推測される。検出した築石は石垣の１段目を構成する石である。２段目より上は残っていない。

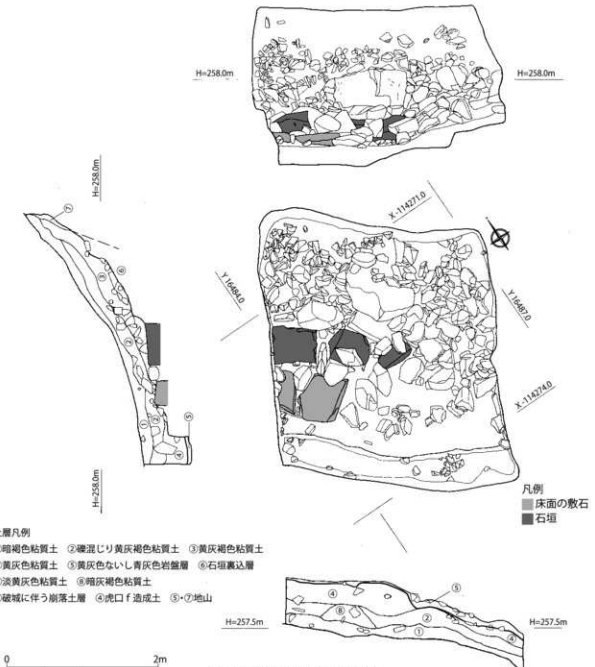


図12　第１区第２トレンチ

また、検出した築石の前面に上面を平らな状態にした石が２つ並んでいた。上面の高さは同じレベルであり、石垣の前面に据えられている状況から、虎口ｆの床面に敷かれた石であると考えられる。

石垣の築石と床面の敷石は、ともに黄灰色粘質土（④層）に据えられている。トレンチの南端で土層を確認するためにサブトレンチを設定した結果、④層の下層は黄灰色ないし青灰色岩盤層（⑤層）であり、④層は虎口ｆの造成土であることがわかった。なお、④層から半截菊花文を中心飾りにもつ軒平瓦が出土した。④層から出土した瓦については現在、分析中であるが、虎口ｆ

の造成時期を考える上で重要な資料と認識している。

石垣の築石の後方には多くの裏込石が確認できた。トレンチ北東壁面では裏込石が出土せず、良く締まった淡黄灰色粘質土（⑦層）が確認できるだけである。⑦層は石垣を築く際に斜面を削った切岸面であると考えられ、築石から⑦層までの間が裏込層（⑥層）である。裏込の幅は約1m。

写真6　第2区第2トレンチ　石垣検出状況

なお、トレンチの中央部で裏込石の上に幅1m、高さ70cmの大型の石が崩落した状態で検出できた。この石は、本来、石垣の築石だったものと考えられ、石垣を崩した際に前面に転落せず、後方に落ちてしまったものであると推測している。検出したほかの築石よりも一段と大きい石であり、虎口fの石垣の中で鏡石の役割を担った石ではないかと考えている。

C　第3トレンチ

虎口fの西側斜面を対象としたトレンチ。斜面裾部に設定した。トレンチの規模は3.0m×3.5m。

表土（①層）の厚さは10cm以下と薄く、腐食土に小礫が多く混じる状態であった。①層を除去すると、拳大の礫が大量に出土した（図13）。この礫を含む黄灰褐色粘質土（②層）の一部分を掘削すると、石垣の築石と思われる大型の石が確認できた。②層は下層の大型の石を覆うように堆積しており、石垣の構築に伴うものではなく、石垣を崩した際の崩落土である。②層に大量に含まれる栗石は石垣の裏込石が転落したものであり、破城によって石垣が壊されたことを示していると考えられる。②層の厚さは15～40cmで虎口fの内側に向かうほど薄くなる。

今回の調査では破城の痕跡を示す石垣が崩れた状態に意味があると考えた。そのため、転落石については築石を覆う部分のみを除去して石垣の位置を把握できる状況まで掘削し、石垣の前面に崩落した石についてはそのままの状態で残した（図14）。

石垣はトレンチ内の北西側で築石を6石確認した。トレンチ南西端部には築石が確認できなかったが、石垣のすぐ前面に2方向の面をもった石を崩落した状態で検出したことから、当該付近が石垣の隅角部あたる可能性がある。

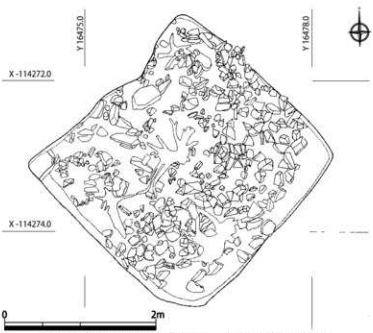


図13　第1区第3トレンチ　上層栗石崩落状況

写真７　第１区第３トレンチ全景

写真８　第１区第３トレンチ　石垣

検出した築石は幅40～80cmほどの石であった。高さについては、石垣前面の崩落石を除去していないために正確な数値はわからないが、概ね50cm前後と推定される。築石を確認できなかったトレンチ南西端の状況からみて、検出した築石は石垣の１段目であると考えられる。なお、石垣に向かって右から２石目の位置のみ２段目の築石がかろうじて原位置をとどめていた。この２段目の石の状況から考えて、虎口ｆの石垣はほぼ垂直に立ち上がっていたと推測される。

また、トレンチの中央付近と南半部にて上面を平らにした状態で据えられている石を３つ確認

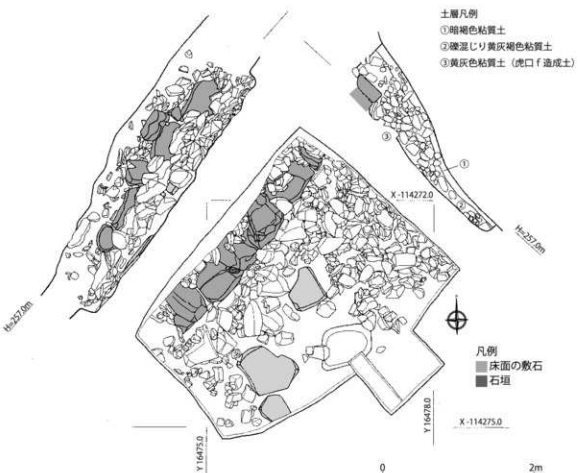


図 14　第１区第３トレンチ

した。検出当初は門の礎石である可能性を考えたが、石垣面に対して平行に並ばない点、石と石の距離がバラバラである点、中央部の石と南半部の石の上面レベルが水平ではなく、20～30cm程度の高低差がある点などから、虎口ｆの床面に敷かれていた敷石である可能性が高い。敷石は第２トレンチでも検出されているが、敷石上面の高さは第２トレンチの敷石と第３トレンチ中央部にある敷石で約50cmの高低差がある。このことから考えると、虎口ｆの床面は傾斜していたと推測できるが、床面に石を敷いている状況からみて、当時は階段状になっていたのだろう。

現在、虎口ｆのほぼ中央には散策道が通っているが、第３トレンチでの遺構検出面よりも散策道のほうが低い。おそらく後世の地形改変によるものだろう。

一部、土層断面を観察するためにサブトレンチを設定した。その結果、黄灰色ないし青灰色岩盤層（④層）の上に黄灰色粘質土（③層）が堆積している状況がわかった。石垣や床面の敷石は③層に据えられた状態であり、③層は虎口ｆの造成土であると判断できる。

第２節　第２区

虎口ｆの南側に配置された曲輪Ⅻを対象とした調査区である。曲輪奥側の斜面と曲輪東側の斜面の状況を確認するために２箇所のトレンチを設定した（図９）。

Ａ　第１トレンチ

曲輪Ⅻの奥側にあたる斜面裾に3.5ｍ×5.0ｍの規模で設定したトレンチである。曲輪奥の切岸の状況を確認することを目的とした。

厚さ20～25cm程度の表土（①層）を除去すると、細かい小礫を多く含む暗灰褐色粘質土（②層）が露出した。②層の厚さは、斜面裾部では30～35cmほどであるが、曲輪の平坦面では10cm前後と薄くなる。②層は木の根の攪乱を受け、ビニールなどの現代物も混入しており、自然崩落によって堆積した土層であると考えられる。

②層を除去すると、黄灰色粘質土（③層）が現れる。③層は瓦や拳大以下の礫を含んでいた。また、トレンチ中央部で大きさ50～60cmほどの石を６個検出した。列をなしているようにも見えるため、調査の途中段階までは原位置をとどめていると考えたが、調査を進めると、これらの石はすべて③層に内包され、曲輪床面と考えられる下層の明黄灰色粘質土（④層）上面から浮いた状態であった。③層からは、城の時期とみられる瓦が出土することと、原位置をとどめない石が存在することから破城に伴う崩落土であると推定される。

②層と③層を除去すると、トレンチ北西面にあたる奥側の壁面には地山である淡黄灰色粘質土（⑤層）が露出した。当初、曲輪奥の斜面に石垣が存在した可能性を考えたが、トレンチ内から石垣に伴う栗石が確認できず、当該位置には石垣を築かなかったことがわかった。したがって、トレンチ北西面で検出した⑤層については、城の切岸部分であったと考えるのが妥当である。トレンチ内で検出した大型の石につい

写真９　第２区第１トレンチ全景

ては、上方から崩落したものと考えられ、切岸裾部から少し離れた位置にまとまっていることも傍証となる。

なお、④層の曲輪床面は厚さ５～10cm程度で、その下層には青灰色の岩盤層が確認できる。曲輪を造成する際に斜面を削って平坦面を造り出したことが推測できる。

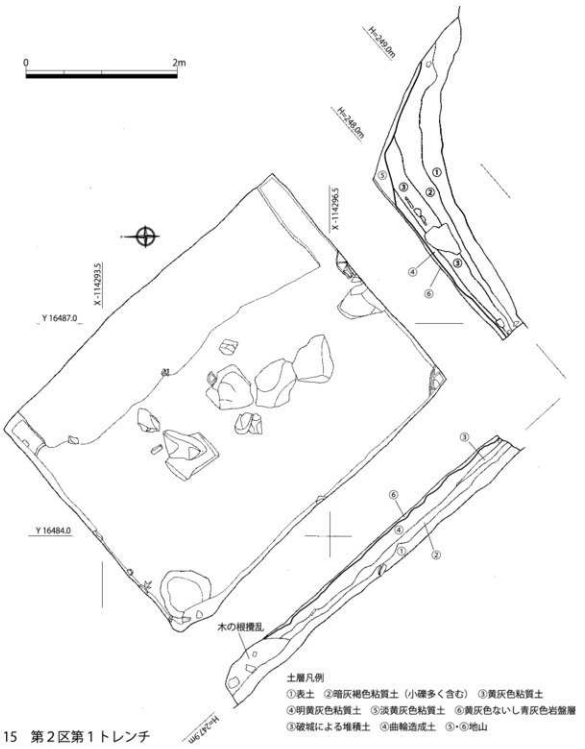


図15　第２区第１トレンチ

B　第２トレンチ

曲輪Ⅻの東端部には曲輪上方から伸びる土塁があり、曲輪の南端から約10ｍ辺りで途切れている。また、曲輪Ⅻの南西側には小さな平坦面があり、曲輪Ⅻに付随する小曲輪とみられる。高低差は2.2～2.3ｍ。本トレンチは、土塁が途切れる箇所に隣接する形で曲輪Ⅻの上面から小曲輪までの斜面に設定した。トレンチの規模は3.0ｍ×4.5ｍ。曲輪Ⅻの南西側斜面の状況を確認することを目的とした。

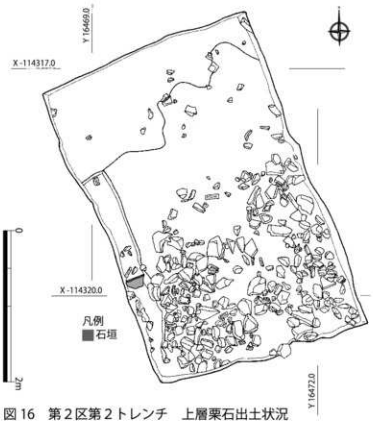


図16　第２区第２トレンチ　上層栗石出土状況

表土（①層）および木の根などの攪乱を受けた土層（②層）を除去すると、拳大程度の石が斜面の裾部を中心に密集して出土した（図16）。一部に断割を行ったところ、下層より石垣の築石が出土した。断面を観察すると、築石を拳大程度の石を多く含む淡黄灰色粘質土（③層）が覆っていることが確認できたため、③層は破城に伴う土層と考えられ、拳大程度の石が密集する状況は破城によって石垣の栗石が転落した状況を示すと推定できる。

転落した栗石を含む③層を丁寧に除去していくと、曲輪Ⅻの南西斜面を固める石垣が出土した。残存している築石は１段目のみで５石を確認した。築石は幅50～60cmほどの自然石を用いていた。石の高さも50cmほどであるが、15cmほどが小曲輪面より下に埋まった状態であり、築石は小曲輪面から35～40cmほど露出する。なお、石垣に向かって一番右側の築石は縦長に据えられ

写真10　第２区第２トレンチ全景　石垣検出状況

写真11　石垣と小曲輪造成断面

た立石となっていた。

築石の背後には拳大の裏込石が数多く詰められていた。裏込の幅はおよそ1m。裏込の一番奥、地山面にもっとも近い位置には他の裏込石より大きい人頭大の石が置かれていた。おそらく背面の土留め効果を狙ったものと推測される。裏込石は小曲輪面から1.25mの高さまで残存していた。

一部、築石の下部を確認するため、断割調査を行ったところ、1段目の築石の下部には一回り小さな根石を置いて、築石の上面を揃えて横目地が通るように調整していた。

断面観察の成果をもとに石垣の構築と曲輪面の造成過程が次のように復元できる。

① 斜面をカットして切岸面を造成する。

② 切岸面から約1m手前に1段目の築石を配置する。その際、築石の下には根石を入れ、築石の上面が揃うように調整する。

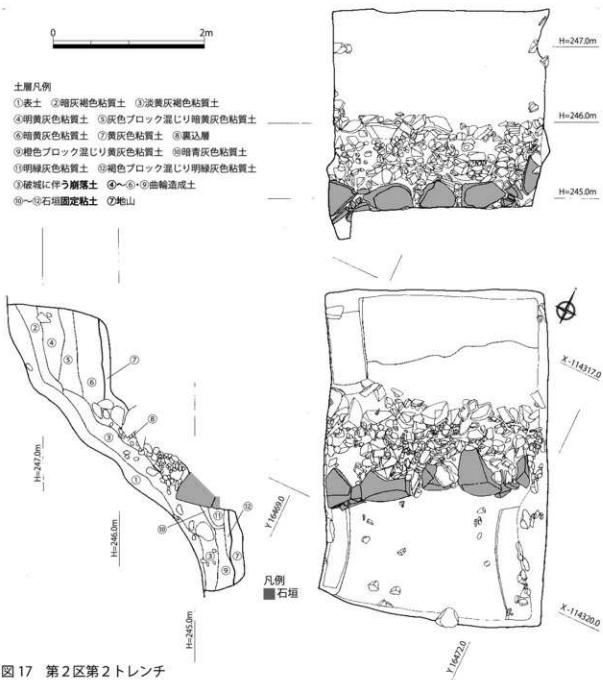


図17 第2区第2トレンチ

③　据え付けた石を固定するように築石の前面に粘土を貼り付ける。貼り付ける高さは、築石の下端から約１／３程度。

④　築石の背面に裏込石を詰める。この時、切岸面に接する部分には大きめな石を配置して土留めとする。

⑤　築石の前面に貼り付けた粘土の高さに合わせて造成し、小曲輪を形成する。

⑥　２段目より上の石を順番に積み上げる。

第３節　第３区

曲輪Ｘの南西側下方に配置された曲輪Ⅺを対象とした調査区である。曲輪の北東側と南西側の状況を把握するために２箇所のトレンチを設定した（図10）。

Ａ　第１トレンチ

曲輪Ⅺの奥側、曲輪Ｘの南西斜面の状況確認のために設定した。トレンチの規模は6.5ｍ×5.0ｍを基本とし、南西側に2.3ｍ×2.0ｍの拡張部①を、南東隅部1.5ｍ×2.0ｍの拡張部②をもつ。調査開始前から斜面部の地表面に大きめな石が露出しており、石垣の存在が想定された。

表土（①層）は厚さ5cm～20cmで、南側ほど厚い。トレンチの北半分では①層の下に礫混じり黄褐色粘質土（②層）が確認される。また、斜面の裾部から南西側には黄灰褐色粘質土（③層）が堆積していた。これら②層と③層は斜面が崩れて堆積した土層であると考えられる。

斜面部分の①層および②層を除去すると、淡黄灰色ないし淡青灰色の岩盤層（④・⑤層）が露出した。この岩盤層はトレンチの北西端から中央部にかけて確認できた。一方、トレンチ中央部より南東側については、岩盤層が確認できず、礫混じり淡黄灰色粘質土が現れる。トレンチ南端で土層確認のための断割調査を行ったが、礫混じり淡黄灰色粘質土層からは遺物の出土がなく、60cm～70cm下層で岩盤と思われる礫層に達した。したがって、④・⑤層および礫混じり淡黄灰色粘質土層は地山であると考えられる。

当初は石垣の存在を想定したが、石垣を検出することはできず、岩盤層および地山層が露出した。岩盤は、泥岩または粘板岩で形成され、非常にもろく、表面が剥落する状況であった。

一方、斜面裾部から曲輪平坦面にかけては暗青灰色ブロック混じり明黄灰色粘質土（⑥層）を確認した。トレンチ南西部の斜面裾では、この⑥層の上面で60cm×60cmほどの礎石と考えられる石を検出した。この石は上面を平らな状態にして据えられていた。据付掘形は確認できなかった。おそらく、曲輪造成時に石を据え、その後、⑥層を曲輪床面として整地したと推定される。

写真12　第３区第１トレンチ全景

礎石は１つしか見つからなかった。組み合う礎石を確認するために、南西側と南東側に一部拡張したが、どちらにおいても礎石を確認することはできず、本トレンチで検出した礎石の性格については明らかにすることはできなかっ

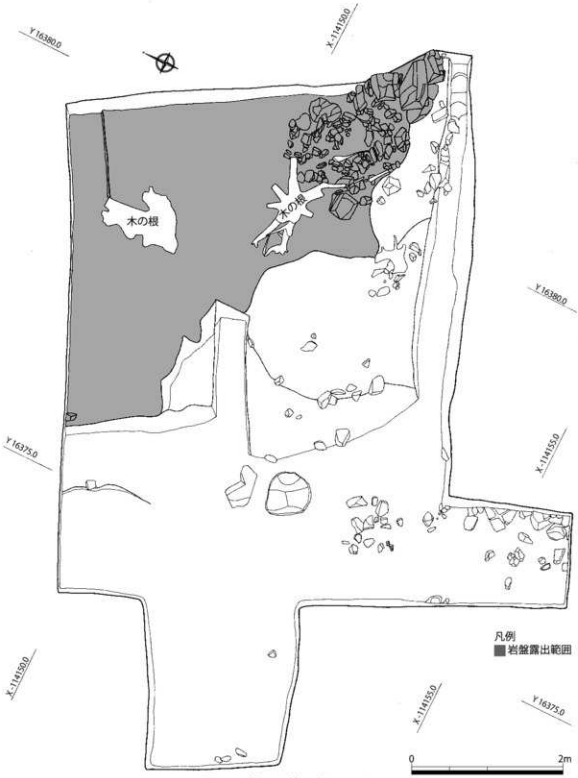


図18　第３区第１トレンチ

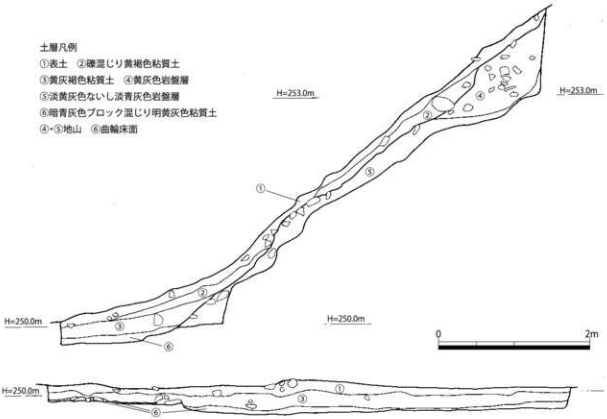


図 19　第 3 区第 1 トレンチ土層断面

た。

B　第 2 トレンチ

曲輪Ⅺの南西側斜面の状況を確認するために設定した。トレンチの規模は 3.5 m × 2.0 m。虎口 p の奥側斜面にあたる。

厚さ 10cm前後の表土（①層）と後世の堆積土である黄褐色粘質土（②層）を除去すると、黄灰色粘質土および岩盤（③層）が現れる。

③層の一部を断ち割ると、灰色もしくは黄灰色の岩盤層（④層）が確認できる。④層は第 1 トレンチの岩盤層と同様である。

また、③層のあり方は、第 1 トレンチの④層と酷似している。第 1 トレンチの状況と合わせて考えると、③層が切岸面となる可能性が高い。

写真 13　第 3 区第 2 トレンチ全景

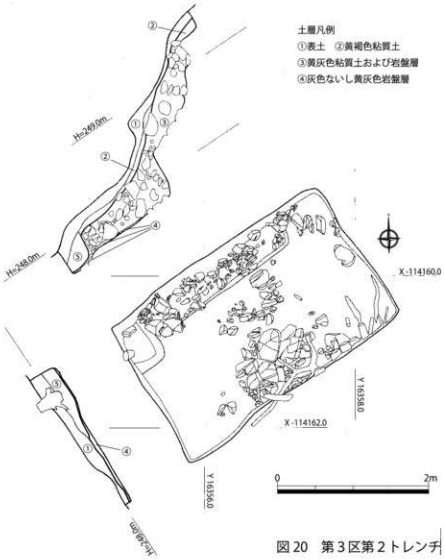


図 20　第３区第２トレンチ

第6章　遺物

第1節　瓦類

第1次調査で出土した遺物の大半は瓦類であった。小面積の調査であったが、整理用コンテナで30箱分の瓦類が出土した。そのほとんどが丸瓦・平瓦であり、現段階では整理調査が十分に行えていない。本報告書では、軒瓦を中心に特徴的なものをピックアップして報告する。

A　軒丸瓦

水口岡山城跡ではこれまでに多くの瓦が採集されており、その中には大溝城と同笵の軒丸瓦が含まれている。残念ながら、第1次調査では大溝城と同笵の軒丸瓦は出土しなかったが、今まで知られていない種類のものが出土した。以下、詳細を記す。

図19－1・2は、18個の珠文がめぐる左巻き三つ巴文軒丸瓦である。巴文は頭部が大きく、尾部の長さは瓦当の1／2周分である。三つの巴のうち二つの尾部が隣の巴に繋がるが、残る一つは繋がらずに独立する特徴をもつ。過去に採集された軒丸瓦の中に同笵のものが存在する。第1区第3トレンチ出土。

図19－3は、左巻き三つ巴文軒丸瓦である。巴文の頭部が小さく、先端が尖る。尾部の長さは短いが、尾部はすべて圏線に繋がる。珠文の数は20個と推定される。第1区第2トレンチのサブトレンチより出土。出土した土層は、虎口fの造成土と考えられる黄灰色粘質土層である。

図19－4は、左巻き巴文。三つ巴と推定される。巴文の尾部が太めで、尾部は圏線に繋がる。珠文はやや大きめで、推定16個。第1区第2トレンチ出土。

B　軒平瓦

これまでに軒平瓦も採集されたものがある。第1次調査で出土した軒平瓦に同笵のものはなかった。以下、第1次調査で出土した軒平瓦について記す。

図19－6は、均整唐草文軒平瓦である。中心飾りを欠くが、唐草は3回反転するとみられる。単位ごとの唐草文がそれぞれ独立する。第1区第3トレンチ出土。

図19－7は、均整唐草文軒平瓦。中心飾りを欠くが、唐草は3回反転すると考えられる。文様構成は図19－6に類似するが、単位ごとの唐草文が繋がる点で異なっている。第1区第3トレンチ出土。

図19－8は、半截菊花文を中心飾りにもつ軒平瓦である。中心飾りの左右には3本で1単位となる水波文がある。また、瓦当の上側にのみ圏線がある。同系の軒平瓦が興福寺や法隆寺などで確認されている。第1区第2トレンチのサブトレンチより出土。出土した土層は、虎口fの造成土と考えられる黄灰色粘質土層である。

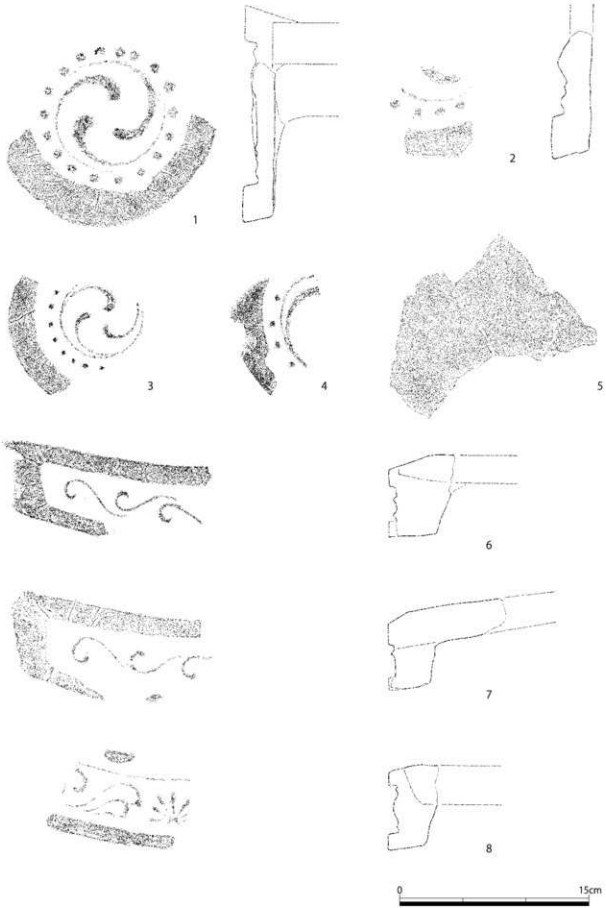


図 21　第 1 次調査出土瓦類

C　その他

図 19 － 5 は、凸面にヘラ書きの平瓦である。現在確認しているヘラ書きのある瓦はこの 1 点のみ。破片のため、ヘラ書きの全容はわからない。残存部分のヘラ書きは「与五」と読める。

第 2 節　土器類

第 1 次調査では土器の出土類の出土が非常に少なかった。

図 20 － 1 は、瀬戸美濃の灰釉陶器の向付である。口径 16.4cm、残存高 3.0cm。底部から強く屈曲して立ち上がる。第 3 区第 1 トレンチ出土。

図 20 － 2 は、瀬戸美濃の灰釉陶器の皿である。高台径 9.0cm。高台の断面は三角形で外側の方が幅広い。出土位置は図 20 － 1 と同じ。

図 20 － 3 は、灰釉陶器の碗である。口径 14.8cm。口縁端部外側に強いナデを施しており、やや凹む特徴がある。第 2 区第 1 トレンチ出土。

図 20 － 4 は、土師皿である。口径 15.2cm、器高 2.0cm。口縁部上半にはナデを施し、下半は無調整でユビオサエが残る。第 2 区第 2 トレンチ出土。

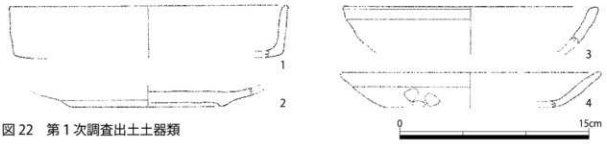


図 22　第 1 次調査出土土器類

第７章　まとめ

第１節　調査成果について

第１次調査の成果をまとめると、以下のようになる。

①第１区

大手枡形虎口（虎口ｆ）を対象とし、枡形虎口の構造解明を目的とした。調査の結果、枡形虎口の内には石垣が築かれていたことが判明し、さらに床面には敷石があったことがわかった。

②第２区

虎口ｆに隣接する曲輪Ⅻを対象とした。調査の結果、曲輪Ⅻの外側斜面には石垣を築いていたことがわかった。

③第３区

城の西側にある曲輪Ⅺを対象とし、城西側の構造を明らかにすることを目的とした。その結果、石垣を確認することはできず、城の西側については中世以来の切岸によって城を築いていたことがわかった。

第２節　枡形虎口の構造

第１区の虎口ｆでは、第２トレンチおよび第３トレンチで石垣の存在を確認した。また、第１トレンチでは土塁裾部で石の抜き取り痕跡を確認し、土塁ではなく石塁であったことが判明した。これらの調査成果から虎口ｆ内部は石垣や石塁に囲まれていたと考えられる。

虎口内部の北面と西面の石垣は、第３トレンチでの検出状況からほぼ垂直に積み上げられていたものと推測でき、現況の地形から考えて、石垣の高さは2.0 m～2.5 mほどと推定される。一方、南側の石塁は、高さ１m前後であったと考えられる。

虎口ｆは枡形虎口であり、通路が二度折れ曲がってクランク状になる。石垣および石塁の検出状況から、通路の幅は外側が約4.8 m、折れ曲がった内側が約3.6 mであり、虎口内部の方が狭くなっている（図23）。今回の調査では門跡を確認することはできなかった。枡形虎口内の門の詳細については今後の調査成果に委ねたい。

また、第２トレンチと第３トレンチで上面を平らにして据えられた石を見つけた。虎口内の床面は石敷きだったと推測される。

第３節　大手の曲輪

曲輪Ⅻを対象とした第２区では、第２トレンチにおいて石垣を確認した。また、トレンチ外であるが、曲輪Ⅻの南側斜面に石垣が残存していることが地表面観察で確認できた（写真14）。このことから、曲輪Ⅻの外側斜面については、三方に石垣を築いていたと推測できる。

また、第１トレンチにおいては石垣が確認できなかったことから、曲輪奥の斜面については石

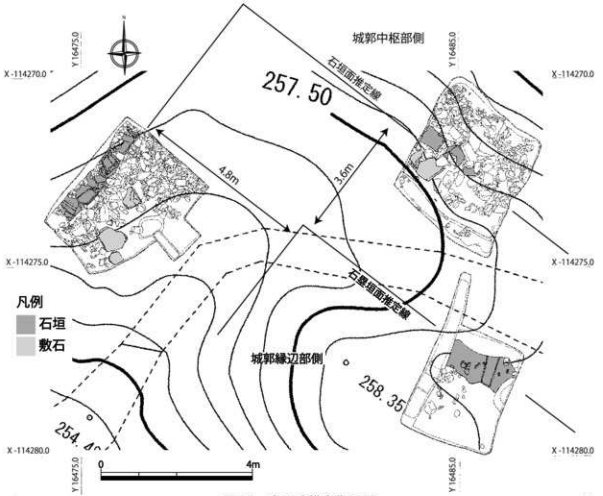


図 23　虎口 f 推定復元図

垣を構築せず、切岸としたと推定される。なお、第 1 トレンチで上方より崩落した石垣の築石とみられる石が複数出土した。これらの石については、曲輪Ⅻの上方にある虎口 f の外側の石塁の積み石ではないかと推察している。

現在、山頂へ登る道は曲輪Ⅻの上方を通り、虎口 f に至る。しかし、城があった当時に現在の登山道と同じルートが大手道だとすると、曲輪Ⅻは防御上、何の役にも立たない。立地から考えて、曲輪Ⅻは大手道を防御し、虎口 f を守るための曲輪と推測できる。曲輪Ⅻの外側にあたる斜面が石垣に囲まれている理由もそのためと考えられる。そこで、曲輪Ⅻ周辺の現況地形をみると、曲輪Ⅻの西側に幅広の谷が存在することがわかる。さらに、曲輪Ⅻのやや下方、この谷を挟んだ位置には曲輪Ⅻと同じような曲輪Ⅻが配置されている。これらの位置関係も考慮すると、当時の大手道は曲輪Ⅻと曲輪Ⅻの間にある谷筋を通っていたと推定され、山麓から一直線に登っていた可能性も考えられる。

写真 14　曲輪Ⅻ 南側斜面に残る石垣

第４節　城の西側の構造

城の西側部分を調査対象とした第３区では第１トレンチおよび第２トレンチのどちらにおいても石垣を確認することはできなかった。両トレンチとも岩盤層が露出し、城が築かれた当時は切岸であったと考えられる。

全体の構造の把握は、今後の調査成果に委ねなければならないが、今回の調査成果から考えると、曲輪Ⅰと曲輪Ⅺを区切る堀ｍより西側については石垣を構築しなかった可能性がある。

第５節　城以前の瓦の出土

第１区第２トレンチにおいて、虎口ｐを造成する際に整地したとみられる盛土（黄灰色粘質土）の断割を行ったところ、その造成土から一定量の瓦が出土した。すべての出土瓦の分析はまだ完了していないため、造成の時期を明確に押さえることはできないが、城の時期よりも古いと考えられる瓦が出土した（図21－３・8)。これらの瓦の時期には幅があるが、概ね 15 世紀～ 16 世紀前半と考えられ、天正十三年築城の水口岡山城の時期より明らかに古い。

『甲賀郡志』に記されている大岡寺の縁起によると、寺はもともと山中にあり、中村一氏が築城する際に寺を山麓へ移転させたとある。この縁起の真偽については、これまで不明とされてきたが、今回の調査において城の時期以前の瓦が出土したことは、城以前に古城山内に瓦葺建物が存在していたことを物語る。中世段階において瓦葺建物の代表は寺院であることから、当該瓦が大岡寺の痕跡を示すものかもしれない。この点の結論については、今後の調査成果に委ねたい。

報告書抄録

ふ り が な	へいせいにじゅうごねんど しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	平成25年度 市内遺跡発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	甲賀市文化財報告書
シリーズ番号	第22集
編 著 者 名	小谷徳彦 渡部圭一郎
編 集 機 関	甲賀市教育委員会
所　在　地	滋賀県甲賀市甲南町野田810番地
発行年月日	平成26年(2014年)3月20日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査面積(㎡)	調査期間	調査原因
花池遺跡	甲賀市水口町北脇	25209	363-110	34° 58′ 41.4″	136° 8′ 45.4″	9.0	2012.5.21～2012.5.22	個人住宅
水口城遺跡	甲賀市水口町本丸	25209	363-113	34° 58′ 9.6″	136° 9′ 55.5″	9.0	2012.6.6～2012.6.13	個人住宅
城南遺跡近接地	甲賀市水口町水口	25209		34° 57′ 59.6″	136° 9′ 43.3″	1300.0	2012.9.14～2012.10.12	店舗
城南遺跡	甲賀市水口町水口	25209	363-111	34° 57′ 56.6″	136° 9′ 58.3″	95.0	2012.10.22～2012.10.31	その他建物
北泉遺跡	甲賀市水口町北泉	25209	363-104	34° 59′ 6.6″	136° 8′ 25.2″	15.0	2012.11.8～2012.11.13	個人住宅
北泉遺跡	甲賀市水口町泉	25209	363-104	34° 58′ 48.6″	136° 8′ 27.7″	30.0	2013.3.22	個人住宅
柑子遺跡	甲賀市甲南町柑子	25209	366-056	34° 53′ 59.3″	136° 10′ 47.6″	4.0	2013.1.29	その他開発
倉治城遺跡	甲賀市甲南町新治	25209	366-045	34° 55′ 24.9″	136° 9′ 44.9″	9.0	2012.12.25	個人住宅
水口岡山城遺跡	甲賀市水口町水口	25209	363-087	34° 58′ 12.8″	136° 10′ 50.2″	106.6	2012.11.14～2013.3.29	遺構確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
花池遺跡	集落	古代～中世			
水口城遺跡	城跡	近世			
城南遺跡近接地			自然流路	土師器、瓦器	
城南遺跡	散布地	中世～近世		須恵器、土師器	
北泉遺跡	集落	古代	旧地形の落ち込み		
柑子遺跡	散布地	中世			
倉治城遺跡	城跡	中世			
水口岡山城遺跡	城跡	室町	石垣・切岸	瓦、灰釉陶器、土師器	

甲賀市文化財報告書第22集

平成25年度　市内遺跡発掘調査報告書

印刷・発行　2014年3月20日
編集・発行　甲賀市教育委員会
滋賀県甲賀市甲南町野田810番地
TEL　０７４８－８６－８０２６
FAX　０７４８－８６－８２１６
印　　刷　村田印刷株式会社